

中島生々庵 共著
中島小石
句画集

生々庵

頒価 三千円 (送料二百円)

本社でお取次ぎいたします

残部僅少！ お申し込み順に送本！

川柳塔社
同人句集

「川柳塔」

一冊千五百円・送料二百円

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚焼 饅売
焼餃子
又焼饅

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば

蓬萊

TEL (641) 0551~2



＜出張店＞ なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストア／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

指導者

余世いくばく死の連想は寄せつけず
老の体臭錆び釘の如く劣等感
秋空に遙かとかぬすすきの穂
面憎いまでにライバルゆきとき
孫の笑顔我慢がならず抱き上げ

月刊誌「児童心理」11月号に、かつて六大学野球で監督をして居た某氏の談として、選手を育てるコツに就いて次のことが書いてあった。『選手それぞれが、大学野球とは何かを明確にする必要がある。それは、下手でもよいから、何かをつかもうとして、懸命に努力する者を一流の選手と見るということだ』と言ひ、続けて曰く『それだけしか打てないのか、投げられないのか、俺ならこんなにかけるぞと、監督が、自分の能力をひけらかして終うと、選手は、監督たちは特別な人間と

拒絶反応を起こし、とても指導がしにくくなる』と言つたとある。野球の監督にして然りである。中国政府の指導者であつた毛沢東の、若もの育成力、指導力が如何に偉大であつたかを、今更のように感銘の外はない。

『川柳とは何かを明確にする必要がある。それは何かをつかもうとして懸命に努力する者を一流の川柳人とするのである』とおきかえてみたらと、ふと思う。目に見えない秋風を肌でとらえたような感じをうけた。

中島生々庵

川柳塔十一月号

座右の句

そのあととは対立のまま雪となる

(和美)

私の句

丸ければまるく金魚は泳ぐなり

中筋三幸



川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

指導者

中島生々庵 (1)

川柳界の七不思議

長野文庫 (2)

俳風柳多留廿五篇研究

(十二)

(24)

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

川柳塔 (同人作品)

若本多久志選 (4)

水煙抄

川村好郎選 (28)

麻生路郎物語 (23)

東野大八 (21)

秀句鑑賞 (同人吟)

西尾大八 (26)

近作 (水煙抄)

谷垣史好 (37)

百人一首と川柳 (29)

富士野鞍馬 (36)

愛染帖

正本水客選 (38)

第12回はたらくうた

(同人特集)

(40)

福田丁路・嘉数千代香・山根白星・高橋夕花

川柳界の七不思議

長野文庫

不思議も一つの場合は怪奇じみているが、七不思議と言うと少し滑稽味があつてペーソスをさそつたり、時にげらげら笑いの種になつたりする。町内一の「けち」が百万円寄附したら「不思議」と言わないで「七不思議」という。七不思議は意外性のことだろうか、推せんと言う割り込みも七不思議

どの世界にも七不思議と言うものがあるのだから川柳界にも七不思議があつても不思議ではない。例えば作品の発表形式に三才、五客式があるが、これを廃止せよと唱えるのも七不思議のようだ。現在句会や雑誌の運営は主催者とか編集者の自由で(全部一列平等、特選一句、秀吟三句、三才五客)根拠のある規定はないのだから、それぞれ自由にすべきで放任しておけばよいものと思う。三才五客を不可とするなら、囲碁、将棋の「段」「茶道、華道の「伝」「武道の「前鋒、中堅、大将」更に相撲の「横綱、小結」などもおかしいではないか。「三才五客」を古風な「しきたり」だから不可とするなら「軸」と言う選者

三宅不朽・若宮武雄・吉岡通児・遠山可住

51年度二賞発表句会と同人総会……………(54)

吉田水車氏逝く……………菊沢小松園(44)

小川静観堂氏逝く……………吉田文子(45)

雅号ぶつちやけばなし……………有信新之助(46)

初歩教室……………不二田三夫(47)

大萬川柳「連想」……………山根白星(48)

柳界展望……………原田一風(49)

本社十月句会……………本田恵二朗(50)

各地柳壇(佳句地10選)……………川村好郎選(51)

一路集「米」……………(庸佑・整理)(52)

「秋晴れ」……………中川滋雀選(53)

編集後記……………桑原喜風選(54)

……………横山一声選(55)

……………西森花村選(56)

……………(二三夫・葉子)(57)

座右の句

人生の傾斜へころげまいとする

私の句

妻が一步 わたしが一步道がつく 大峠可動

(二三夫)

吟にも一言あるべきだと思ふ。大体「軸吟」

とは句の中で軸(中心)となる句、つまり他の

の句をふり廻すほどの秀吟であるべきだから

(自句、拙吟とは意味が違う)単に選者吟と

言うだけの意味ではないのであるから、これ

も改めるべきだと思ふが、

とに角、現行の天地人、五客、軸など別に

改廃するに及ぶまい。

もう一つの七不思議は、近頃多くの雑誌の

表紙に「日川協加盟」と言う印刷があるが、

あれはどういう意味だろうか、凡そ如何なる

雑誌でも、みな何らかの協会、組合、団体に

所屬しているが「何々出版協会加盟」などの

標記をしている雑誌は一つもない、独り川柳

の雑誌が愚かしい標記をしているのこそ時代

錯誤も甚だしい。

昭和十八年ごろ、官製の「日本川柳協会」

が出来て全国各地に支部のあったことは多くの

柳人の知るところであるがその後、解体され

た事実はないが、この日本川柳協会の名前

を継承しているのは、この協会の統きかどう

かもはつきりさせ度いし、若し全然別個のもの

のなら「新日本川柳協会」とすべきではないか。その他、川柳界には「作家と選者」の混

用もある、ルールを知らない野球審判のよう

な、故実を知らない行司も居て選手を間誤つ

かせているのも七不思議である。



若本多久志選

頂上へ立てる男の旗がある
神戸市 小浜 牧人

一の矢が外れた二の矢に苦心する
近道のどこかに罫が伏せてあり
事勿れ主義の謝ることに馴れ
首位の座を守るいのちをすり減らし
誤診とは言わず薬が替えてあり

神戸市 仲 どんたく

河内弁でどなって弱気カバーする
オフィスに色ありOLの草月流
石仏が秋聞いている蟬時雨
よよと胸に泣きくずれたことも無く
日雇いの肩もみ合うて昼休み
秋待たず一葉散りしクラス会（O君逝く）

貝塚市 野坂 つき子

夕焼けに昔の事は思うまじ
なにもかも話すとひぎが冷えてくる
鈍感になってやさしい事に触れ

洗濯機昨日とちがう回りよう
少しだけ疑っている瞳と出合う
レモンティー甘い話を聞きながら

桜井市 岩本 雀踊子

過去をくる女の五指にある月日
水煙へ夕陽が沈むはぐれ鹿
女ひとり生きる美学に酔っている
迎え火に家に水子がひとりいた
ゴミ箱へ乳房が枯れてる女犬

松原市 谷垣 史好

屑籠の位置まで腹が立ってくる
かぼちゃの絵仲良くするはむつかしき
ギヤマンの妖しき光 秋となる
ひとりぼっちで淋しかったる仏さん
死ぬるまで朱実は夜の女です

神戸市 中村 ゆきを

金に縁なかった父の骨白し
もうガンの辛さないうと手を組ませ

父の死後父の無口が判りかけ
金づくり下手でも素直な子を残し
通夜の友あけすけ云うて温かい

八尾市 大路美幸

装うて女は過去を消したがる
単純な顔だけが乗る満員車
梯子から降りた男の顔が好き
時々帽子を脱ぎたくなる人形
合掌の指の先から冷えてくる

八尾市 香川酔々

お国訛りの赤い鼻緒のひとに会う
芭蕉碑を訪ねて白い風を見る
滝壺に生れる渦に秋が来る
惣領の甚六のまま背が伸びる
煩惱を梵の一字に背負わせる

青森市 工藤甲吉

五十年現人神も人となり
つながれた犬の諦めごろり寝る
まん丸い月をひとり抱いて寝る
きりぎりす胡瓜の色で死んでいる
安静はヒゲの中から顔を出し

米子市 林瑞枝

気の抜けたビール恩師の鞭が鳴り
出迎えの口下手荷物を提げたがり
天恵のライバル人生の糧となる
ひと言の親切身に沁む粥の味

夫病んで気負うた胸の散る思い

大阪市 不二田 一三夫

ゆれながら倒れまいと独楽 必死
コンクリートジャングルの思想に色がない
定年のないペンだこを愛しとも
台風も17 手に負えぬ年頃か
捕まった瞬間 妻子が目にダブる

八尾市 宮西 弥生

大根を煮つめる母にも里ごころ
夜の長さをグラスの底で踊ってる
花畠へ中年ひとり来た迷い
角とれた今日は悲しい喪主であり
音たてず優雅に逢える恋してる

倉敷市 稲田 豊作

情熱の果てを鴉に笑われる
鉄柱に死者一名という損傷
ソロバンを秘めて商談甘く見せ
諦めてもの言わぬ日が平和
酔えば泰平酔わねば末世に見えてくる

藤井寺市 西 いわを

濁流に吞まれそうなり蟻のごと
老醜をきわめつくして美に返る
想い出の女まぼろしのごと無限
雁来紅炎の燃ゆるそのままだ
精魂は菊の花蕊に吸込まれ

大阪市 小出 智子

妻の財布にきびしい秋がしのびよる
夫唱婦随で日曜のにぎりめし

本棚の本 死ぬ日のことは考えぬ
女同士の橋をときどき踏み外す
尻尾振る野犬の乳房が張っている

大阪市 河野 君子

夏の終りのカンナに情けなどかけぬ
人待てばうなじに忍ぶ秋の音
涙線の弱さが武器となることも
強情な夫へ哀しさだけ残り

風のまにまに鳴るは日陰の老いの鈴

今治市 原田 一風

注ぎもせず注がれもせずに缶ビール
冷蔵庫総点検の妻の留守
老人手帳修正しない顔を貼り
シャンプーが少して足りる髪を撫で
歯をみがく前を過ぎ行く淡路島

米子市 八木 千代

香煙に一会の絆たちのぼる
はみ出して輪の遠心を脱け切れず
聞き流した話題の痛み眼をつむり
水すまし小さな嫉妬の輪もくぐり
定年の影へせめての手弁当

八尾市 高橋 夕花

やがて秋 欠けた陶器を捨て惜しむ
うす衣をたたみ終って母となる
雑布を縫って満ちたる小半日

茶を点てる男の静を見てしまう
こころ放して写経の筆を軽くする

高槻市 若柳 潮花

萩を書く絵筆は月を書き添える
若いのが太鼓かつぎに戻って来
虫の音に郷愁のないネオン街
恐山御魂をよせる火が然える
柿の実が土塀を染める城下町

大阪市 本多 柳志

マスコミに媚びて主張を見失い
月を覗る窓窓にある平和
寡婦の城守り徹せぬ歳と知れ
ローソクの最後のように炎えて往き
女唯泣くにも意識したポーズ

美称市 安平次 弘道

城下町過去にすがって生きている
スピードが出るからスピード違反出る
不況まだ抜けずサルビヤだけが燃え
防災訓練楽しんでる顔もあり
無精ひげ週休二日もてあまし

竹原市 三宅 不朽

母の明るさ妻の明るさ米満す

逆境へ童よりまろき寡婦の膝
ふるきよき刻に包まれ墓碑巡る
風の表情笑う羅漢に泣く羅漢
妻の留守男ごろんと昼を抜き

竹原市

山内 静水

いま出来ることは子供に書く手紙
城主失格 妻に寝込まれて
ああ言えばこう言い楽しむごと親子
勿体ないお話し口止しかとされ
水嚙んで飲む鶏に胃が痛む

京都市

都倉 求芽

楷、行、草、仮名も混じえて世を渡り
曲っては直し直しては曲る足跡の
黒焦げの屍ひまわりの成れの果て
秋の夜の長さも長し齒の痛み
無季野菜みたいにゼスチャーだけの人

竹原市

小島 蘭幸

秋の夜のひとり墨でもすりましよう
恋の序曲を虫が奏でているベンチ
生きているから自動巻き止まらない
振り向きはしない男の眉である
川は流れて女は母となる強さ

三重県

川上 大輪

カマキリの鎌に憎しみなどはない
待合室孤独 知らない人ばかり

死亡欄人の命が軽く載る
近年のそれから燃えるもの待たず
過去帳のここから涸れていた血筋

東大阪市

竹中 肖二

遠雷が望郷の念つのらせる
端正な顔で漫画になり難い
墨染めの衣悟った訳でなし
娘の肌へみな虹色となるタオル
石女になかなか金が貯らない

東広島市

高橋 鬼焼

手火花は悲し故郷をすてた父
子の夢をぬらして雨の日の広場
セイルスの自信明日を語らない
演技などしらない妻のこながすり
母の鈴母の涙でつめてある

松江市

小林 孤呂二

羽目はずす日の積木は揺れている
旗色鮮明にすれば守りの盾がいる
清流のごとく生きたい座右を持ち
だとしても君の噂さだ信じまい
隅っこでコスモス秋を忘れてず

竹原市

森井 菁居

風をかき分けてトップの座が愉し
闘いの休止符茶房の灯がやさし
葛藤の月日を生きて証拠とす

セールの励みとせんか棒グラフ
わびしさは計報相次ぐ秋の冷え

富田林市 和田 維久子

流行のものさし親子の距離となる

嘘も方便許す心へ受話器おく

ものさしの艶に滲んだ母の過去

ワイシャツへ亡父の幻影切なくて

感無量感無限煩ずりの感触よ

島根県 堀江 正朗

欠点を指摘された日 秋は澄み

腹減らぬはず茶話で日が暮れる

孫去んで二人ぼつんとお茶も冷え

酔うて寝て醒めたら虫が鳴いていた

白杖の道へひらひら秋が落ち

大阪市 中川 滋雀

木洩れ陽に仰ぐ 大師の山深く

ありがたやお大師さんの雨に濡れ

燃え滓の芯の堅さに突き当り

昏迷の世相に生きる目をつむり

梵鐘の余韻 先祖の声がする

出雲市 原 独仙

ストリップ芸術と観て憚らず

達筆と名文嘘を信じさせ

帰省して煮べ久しい母の味

冷戦が続き蒸発したい日も

贈り物打算包んだ蒿で来た

大阪市 川口 弘生

沈む陽へ明日を信じている拍手

善悪は人に任せて茜雲

公害は公害 俺のハゲはハゲ

ハプニングの淡い期待も一人旅

参加した意義を強調敗戦記

鳥取市 両川 洋々

紛争の火種を国境抱いたまま

妥協して帰る廊下の長さにも疲れ

見事だまして女の涙すぐ乾き

青春をしのぶ火種を一つ抱き

絶景の夜景へ貧しい灯もまじり

島根県 錦織 文子

人生の円周駆ける影二つ

親切をあげて貰っていい隣り

ハンカチは愛の前科も知っている

悔いのない今日の足跡残したく

親切におぼれた悔につきあたり

守口市 羽原 静歩

能登・佐渡信州の旅

潮の香に子を抱く女颯爽と(千里浜)

降ってやみ降ってやみ能登の百面相

玉砂利を踏んで帝の声を聞く(真野御陵)

窓越しに一茶の家を眺めけり(柏原)

鈍感の底に純情ためている

富田林市 板尾岳人

ネクタイを締めると峰は知らぬなり

峰紅く染まつて冬の峰を呼ぶ

千の顔汗落しながら千の峰

金剛山カウスボタンが落ちてゐる

紳士録金剛山も書いてある

大阪市 大坂形水

彼岸花咲いて墓参を思い立ち

二時間で行ける故郷を遠ざかり

二説ある墓 観光に浮かび出る

山削り島は都会へ土運ぶ

土方した韓国詩人の文学碑

倉敷市 藤井春日

物になる奴だ親方眼をつむり

振り返る吾が足跡の恥ずかしい

残り火を燃して噂気にしない

夢も抱き恋も育てて青春期

岡山県 直原七面山

鳴く臨終の喉仏

尼かて女 恋に泣く

その饒舌の蔭に翼

病葉と共に散る恋

尼崎市 黒川紫香

飛びこんで蛙こつちへ向き直り

赤とんぼ村は祭の仕度らし

電柱の下でだんだんごみ溜る

泣きに來たところで泣き言聞かされる

豊中市 戸田古方

大台原車行三句

縁あらば宿りもあろう行く暮れて

立ち枯の白さやたらに描きとうて

蟬がなく蟬がなくから下界らし

次男の次男寛信産る

手の筋もきつちりとみるお祖母ちゃん

和歌山市 野村太茂津

本流の操舵を若さが嘸うとも

本質の深い流れを航く重味

新物に銜い覗けば撥ねつける

本流で一隅照らす灯は消さず

富田林市 岩田美代

愚痴いっぱい捨てたら海が騒ぎ出し

赤とんぼす早く秋を捕えたる

木屋の香りに昔よみがえる

さだめかも道端の稲穂しごかれる

倉敷市 水粉千翁

去る者を追うてる愛のやるせなさ

秋を着て女清々しき愁い

踏みしめて私の歩く道とする

背伸びして見えぬ一と筋道を行く

悼 森田名人君

鳥取市 河村日満

残暑なお酷しき旅のわらじ履き
呆然として君逝くをきく受話器
君が呼ぶ声のあたりの曼珠沙華
一億の声一億の矢とならず

大阪市 西森花村

解散だ先生も走るゴキブリも
停電に外は秋です天の川
川止めに大阪で待つ新幹線
つらそうに嬉しさかくし値上げです

大阪市 天正千梢

ふるえる心深呼吸でととのえる
松嶺の響き流れは落葉に埋もれて
洗礼は受けたが救うてもらってず
「ほんとう」という言葉の魔術にひっかかり

姫路市 梅谿庵不醉

不精髭そうか君とこも不景気か
オッサンよこの蛸焼に蛸がない
和を以って貴としとする額おろせ
ハイよろしもう一枚と二度撮られ

東京都 山根白星

荒縄で返本される苦心の著

なにものかひねもす追ってくる焦り
ポスターのトマト汗かく涼しさや
役割のある歯車の小さきほど

大阪市 西出一栄

病室の寂 百合の香に満たされる
孫のよなナースに媚びる佻しさよ
病窓に鳩の夫婦と親しゆなり
充実した余生の生き方考える

倉敷市 田垣方大

農道の補装へ蛙とまどいぬ
まだ若い気持ステッキ抱えこみ
野仏に道を聞きたい陽が落ちる
思慕の目がテールランプに吸いつきぬ

高槻市 福田丁路

排気ガスあきらめ顔の地藏尊
秋風が自業自得の身にしみる
ポツポ シュツシュツの旅苦行をなつかしむ
手作りの野菜と今朝も握手する

宝塚市 傍島静馬

煮え切らぬ男が会議もつれさす
何くそと思えど腹を説かれてる
天高く自信がゆらぐ美容食
廃抗の村に祠が捨ててある

西宮市 若林草右

台風よ乱すな静かな虫の歌

無念無想血圧組上に測られる

誌上相談つまりは医者に診て貰え

白雲の自由は強しカーテンつきやぶる

倉吉市 奥谷弘朗

義理でない同情 友がいてくれる

ゆとりなぞ無いのに自適と云う他人

自信句が今日もチラシの裏で出来

なんとなく無駄な気もする歩道橋

宝塚市 小畠無聖

すなおきが科学の目で見ぬ月を愛で

とどまった振子のような夕日映え

紅に妖気をはらむ曼珠沙華

またしても煩惱無尽娑婆の欲

藤井寺市 児島与呂志

じじ馬鹿になって定期の電話口

日々平和もつたいない程何もない

内職の手間賃尊い金に見え

遅れ咲く朝顔小さく競い合い

堺市 高橋千万子

展示会おしやれのセンス拾って出

テレビドラマそつと自分を入れている

裂けそうな胸だと書いてそれっきり

彼岸には彼岸の客あり仏間の灯

西宮市 藤村 べ女

落葉掃く落葉のリズム故郷の秋

今日を生きる精一ッパイの母の詩

子に生きたそれだけで母心満つ

たくらみの火となり巨星いま落ちる

水見市 関 美子

音楽ともだち青春真ん中揺れている

会って知って愛して別れて青春譜

夕やけへ早番ホステス顔伏せた

犯罪と詩情ブン屋は足で書き

島根県 堀江芳子

座布団の座り心地に秋がくる

はい一つ多い返事で聞いてくれ

ふるさとは風に色あり四季さやか

おっこんおっこん相つち打つ孫と

松江市 柳 楽鶴丸

エリート社員三つの顔を持つ

馬鹿の面つけて出勤してやろう

時計止めておこう今日は結婚記念日

母親大会から別人の妻帰える

八尾市 高杉 鬼遊

生き残り兵は軍歌を口にせず

落ち栗は子に捨われる時を待つ

群青の森に沈める魁夷の血

魂がぐんぐん昇る秋の天

松江市 中川 晃男

神様ありがとう 初孫元氣な男の子

秋空がこんなに澄んでる 孫生まる

洗濯機主人の留守を歌ってる

敬老の日へ台風の贈り物

大阪市 山川 阿茶

ジパンはいて昭和の定九郎

下駄箱にスイス・イタリー・スイス靴

流行流行となぶりものにされ

秋日和空果も書入れ時となり

岡山県 横山 一声

人形になって耐えて居る女

運のよい男ブームの波に乗り

頂上があるから山が忘れず

星の夜別れた人を星に恋い

大阪市 吉田 圭井堂

めし三度喰えて守衛も立ってくれ

追いつめた筈その裏に裏があり

経営診断所が不渡りで押えられ

立て込んで馴染みは銚子持って逃げ

岡山県 嘉数 千代香

みな善人に見える目 こころの窓開く

酒は涙か父のところがわかりかけ

敗けた日の雨はこころの奥へ沁む

想い出は音痴の亡母の子守唄

宇部市 平田 実男

お隣りの豚舎へ他人が腹を立て

運送屋もしょんぼり左遷の荷を運び

台風を土建屋違った目で眺め

尻尾ふる犬も蹴とばす反抗期

東大阪市 竹中 綾女

風鈴が南部恋しと騒いでる

敬老日老人はねた話聞く

娘の心奪った彼が憎めない

半日を掛けた煮豆を子が嫌い

寝屋川市 宮尾 あいき

牛乳瓶私の鼻でも邪魔になり

老いて娘に従えとかや御店番

台風予報におののく下界月のぞく

御近所に合せて若く派手に着る

大阪市 金井 文秋

税務署も区切りをつける六十五

健康法ラインを守る三千歩

日々感謝そんな悟りは遠い夢

秋風といっしよにサンマやってくる

西宮市 島居 百酒

神の道人がつくって峻しくし

仏壇を掃除する気も齢や盆

啓蟄だ処暑だと暦あわてもの

いちじくのはしり四、五日待つ値段

岡山県

出原敬一

病んでゐる水車で蟬の今日が暮れ
のがれたい噂へ耳がついてくる
抱く骨の軽さに仰ぐ雲の峰
身にしてみて女 先夫の名をきらう

松江市

恒松町紅

街路樹は何か言いたい枝が揺れ
心得て集金人の愚痴を聞き
お互に逢えば親馬鹿笑いあい
爆音が平和な音に聞ける幸

今治市

越智一水

アクセサリーですと岩肌花をつけ
あの山が雲に抱れて村は雨
消毒だつばめよあっちへ行つて飛べ
背の低さ金で足せないとは淋みし

大阪市

江城修史

甥の死二句

計に急ぐ旅路に人は満ち溢れ
惜別の柩へバラは匂わない

母の忌

秋風に亡母の想い出のみ強し
虚しさの果てなる視野のちぎれ雲

竹原市

時広一路

渡り鳥旅券も持たず旅気まま
今日の星プラネタリウムほども見え

お守りが小さな顔でいた事故車
スランプの一日だけど夕焼ける

鳥取県

林露杖

森田茗人師逝去二句

慟哭の中を冥府の句坐に旅
亡き友ら集い待たる師の柳話
年金に頼る切なき秋の雨
雨五日続いてここにカビが生え

鳥取県

川崎秋女

故茗人先生の靈に捧ぐ

警察のお方とか聞く初対面
川柳の鬼とあがめた師を慕い
還暦の胴揚げ今も日にうかぶ
師の靈へ初秋の風よそよと吹け

平田市

久家代仕男

しみ抜きに時間のかかる自民党
女学生に石焼蕎麦の秋が来た

珠数もてば安らぐことの多い日々
滅入る日は妻がこころの穴を埋め

倉敷市

小幡里風

ハミングで妻と嫁とで味を盛り
拗ねた子が見ているくもの巣作りを
バラの垣境で続く小競合い
何かある肩を沈めて父帰る

岡山県

竹内翁童

昇給はゼロだと家計簿に云いきかせ

展示会ひとシーズンを先取りし

日まわりの恋 太陽はもてあまし

特Aを全部やりたい考課する

松江市 岡崎 祥月

鬼になり蛇になる虫のおりどころ

限界はユックリムード余生我れ

神の斧うけて素直な斧となる

老人でない中年でいる六十路

大阪市 黒田 眞砂

信州に旅して

平湯の夜更けて屋根うつ雨の音

街並みの想い昔に妻籠宿

恵那峡の観音岩は母の顔

意地通し心に淬を苦く溜め

羽曳野市 塩満 敏

一本の糸延びて蜘蛛の起工式

デカンショをお堀のハスもおどりたい

たんぼを大事に大事に吹いてやる

ジーンズが女の線を意識する

兵庫県 遠山 可住

くい盛りへうんと喰べさせ心満ち

金でしかなかった幕切れあつけないし

札幌を固い握手と錯覚し

ひる寝して来たデカンショの豆しぼり

泉大津市 村上 春巳

豪雨禍のテレビすまなく夕餉とる

頬たたたく豪雨に農夫たちつくす

今日生きる幸せの嵩に写真帳

お化粧をすませたリスの美男美女

京都市 松川 杜的

極楽かも寝ころんだまま好きな本

出勤簿の無い役職にしばらく

三十年京に育った京言葉

あんな色だせたらなあーと空の青

枚方市 宮川 珠笑

大恩の社長を赤旗追い回わし

CMのように進まぬ耕耘機

台風が近いと風鈴踊ってる

干天へ雑草地球にしがみつ

松山市 谷 のぶお

台風へ柳 怒髪を振り乱し

蘭におう汚職のニュース聞きながら

挨拶へ挨拶しない自由主義

赤いシャツ似合わない性に生れつき

和歌山市 垂井 千寿子

美しい童話の星を踏む科学

日本画展しばし静寂にとけている

敬老へ小さな勇氣席代る

生花に切られるための美を競い

松原市

玉置重人

机整頓してペンがはかどらず

善人が痰呵切りたいある日ふと

人肌の爛をレンジに教えられ

足跡が残っておらぬ日の自嘲

東大阪市

本多清人

バス停のあてにはならぬ時刻表

土拾う青春もあり甲子園

体調もそうなつて来た週五日

言いたい事言うて定年までの顔

和歌山市

若宮武雄

年輪の数が見映える薩摩杉

北山杉の肌と競うて京女

高層の街のパノラマ見た墓場

行雲流水 野にさ迷えば眼のあたり

橿原市

岩井本蔭樺

ナツメロはわが青春の葬送譜

火星人なみに扱うミゲ25

しまいには野党の無能も腹が立ち

貧政をよそに稲穂の良い穂り

岸和田市

植山武助

着る人が美人に思えてくる縫い子

故郷への道 遠廻りして帰り

サロンパスの匂い同年輩の顔

思い出を辿れば初老に秋の風

島根県

小砂白汀

画帳片手に人生譜を探す

座布団へひやりと秋がしのびよる

満天にギリシヤ神話がはめてある

釈然とせぬ がってんもさせられる

和泉市

西岡洛醉

髪型を変えて女は歴史踏む

平凡で実直でよし僕のみち

濁りなき少年の眼に明日を問う

ふる里の青は昔のままに澄み

倉敷市

野田素身郎

うかつにもバーに弁当箱忘れ

残業へ老眼鏡を拭きなおい

満月かそうかと本を離さない

月明かり噂の影と影が行く

鳥取県

鈴木村瓢子

男みな所詮女にあやつられ

この人の無口をはぐす酒を強い
かあちゃんに叱られてます 夫婦仲
釈然とせず人間味足らぬなり

大阪市 室谷 徹 舟

仲人の折紙つきが親を捨て
文化とは起きたら飯が出来ている
日本列島金には弱い者許り
此のうなじ和服着せたいバスの中

大阪市 島田 雄 峯

紅葉の意義を知っていた もみじ
悲しからずやOL貴族と 云う言葉
一万米上空 地球は丸いと思うロス
それからは言葉がいらぬ握手する

伊丹市 檜 谷 漫 柳

酒好きの亡母へ一杯つぐお盆
月給前スキヤキをする妻を凝視
親切な犯人だったとハイジャック
酒飲めぬ葉の記事を見てる妻

守口市 野呂 右 近

束の間の花しばませて陽は無情
思い出の中に生きてる人老けず
涙壺小さくすぐに溢れ出し
又逢える左様ならだから笑つとき

もう妬め女になって よく眠り
まろやかな人柄過去を打ちあける
そろい踏み孫に曾孫にせまい家
鈍行の一生悔いのない定年

東大阪市 落合 思 月
鳥取県 清水 一 保

森田耆人民の死(二句)
悲報 会者定離とは知りながら
虫の声今宵は悲しいものに聞く
セチ辛い世にも忘れず赤トンボ
働いて疲れドラマを見て疲れ

大田市 藤田 軒太楼

台風の長居に月の出場がない
人生の浮沈に想うほろ苦さ
借りる身の苛立ち三時五分前
損得がないからズバリものが言え

大阪市 西川 誓 二

冬に備えて蟻達は汗をかき
指先から心に通う点字本
手っ取り早く馬より将を先に撃ち
旅人のカメラは能登をダイジエスト

和歌山市 津田 与 史

一と言が云えず夫婦の長い夜

想い出が夜長の部屋を重くする
紅葉燃え燃えない足の血を庇う
日が暮れて野仏ただの石となる

和歌山市

沢山福水

大正の年季を入れた鍬が冴え
名月に人は挽歌をくり返し
責任のない可愛いさで孫を抱く
再起した男の汗に虹が立ち

和歌山市

内芝としよ

朽ち果てても想い出残る家がよし
正体を見てお月見の夢が失せ
満ち足りて天寿の祖母のおおろかさ
設計図南に母の部屋をとり

大和郡山市

森田カズエ

大安の風呂敷鯛の尾がのぞき
大物になるぞ昼寝の兄の寝顔
お手植の松とも知らず蟬が啼き
優勝のメダルにきぎむ青春譜

鳥取市

大塚豊生

乗り替えて里の訛りも遠去かる
日焼けして眠れる妻に野の香り
小細工は捨て真っ直ぐの道を選ぶ
限られた生命と知らずなお挑み

大阪市 神夏磯道子

泣きごとを言わぬ女で孤独なり
名月へロマンに遠く酒を飲む
久しぶり胃袋泣かす母の味
受け入れる心があつて善意生き

京都市 山本規不風

安楽死活字に赤線引いて見る
老人へいばらとならぬ言葉選る
満席のバス賑やかにほっくり寺
子の家に来て水溫し秋の朝

岡山市 川端柳子

台風に生きものとなる山と川
恵まれた人にはめでたさのみ通じ
置去りにした夢だけでもう一度
同じ道歩んでいてもかげ日なた

兵庫県 大江秋月

門かつぎの松に亡父が生きている
公害は別SLにある人氣
親切な人地図に絵も書いてくれ
子の靴もついでに磨く定年後

愛媛県 渡辺曉童

人にはやらぬ 風鈴の風
原爆の碑 ミニで合掌

村の点描 野良犬や猫

木槿の陰に 黒い野良猫

柳井市 弘 津 柳 慶

年金の足しの努めだ愚痴るまい

新築へ何処から来たのか油虫

ほんとうの娘程には嫁を見ず

嫁への当てこすりに妻へ当たり散らし

大阪市 河 井 庸 佑

名月はどっちでもよい月見酒

神妙に自省よっぽどこたえとり

夏休みよく遊びました日記帳

縁談を断る理由考える

仙台市 川 村 映 輝

神経痛娘のお産に飛んでゆき

あばら家でよし七十年を清く生き

中天に名月颯爽として走り

痛むのに医者は何でもないと

笠岡市 松 本 忠 三

背を向ける妻に妥協の隙がない

帰ってたんですかと妻の素気なく

そんな話やめにしように乗ってくる

お客かと思えば道順たずねられ

奈良市 宮 口 笛 生

これもまた経験司会を相つとめ
紫のあざやか秋ナス漬かりけり

敬老の楽しみもなし床住まい

酒を断つために車乗ってます

唐津市 新 岡 回 天 子

来年の物を買っとく店しまい

姑の眼線は上手に読んでいる

晩酌のも一本欲しい謎をかけ

兵庫県 河 原 み の る

時ならぬ渡り鳥かや北の海

としよりの歯が強すぎるのもうとまれて

エンマ庁の疑い殺生飲酒戒

小松市 馬 場 魚 山

いつまでも若さ保てとコマージュル

焼とり屋と知らずに雀くる

長居する梅雨は雷抱いている

玉野市 小 谷 仙 山

街に出たとんぼに帰る沼がない

上向いたままでタンポポ風を待つ

聞き上手他人の裏も引き出させ

諫早市 原 田 明 春

物価高よそに化粧品だけは売れ

ざあますの受付こちらの舌もつれ

サンプルのような女房で物足らず

生駒市

草 深 醉 升

盆栽とまではゆかない鉢いじり

山門を出れば儂い俗世間

会者定離そう簡単に割り切れず

東大阪市

桑 原 喜 風

お座敷に調和のとれた白い足袋

台風の悩み科学に遠く居る

平和なり敷かれても見ると夫婦仲

大阪市

藤 田 頂 留 子

涼風にわびしくゆれる値下げピラ

大師との対話で今日をしめくくる

人間の浅智恵風雨に土下座する

八尾市

内 海 幸 生

目を信じ足を信じて蹴躓く

止り木に妻の知らない顔浮かぶ

最高の思いあがりに長期ローン

堺市

伏 見 茂 美

戒壇めぐり我が身頼りに探りゆく

ふと触れし娘の体温の若さかな

温く大きな夫の手に抱かれ

大阪市

津 守 柳 信

不況風知ってて情に竿もさし

流すまいどうせ解決せぬ涙

石橋を叩き過ぎたか友もなし

和歌山市

吉 野 富 子

勝負師の落ち目にすがるわらが無い

はったりの男で自分に酔っている

骨髓の恨み悟れば運命かも

大阪市

本 間 満 津 子

有難い勿体ないで老いの日々

処方箋のように献立つくられる

一鉢の緑でホッと憩いする

大阪市

神 田 秀 峰

無造作にねじ込む札へ景気観る

期待する景気へ工事のグレーン建ち

五七五に托して不満を打ち明ける

西 尾 栞

実篤の哲学めきてかばちやの画

脇役の名技をはめる記事小さし

更年期筆の乱れとなる才女

支那服の似合う才女で羽田発ち

後学の為と才女誘われる

菊 沢 小 松 園

女シリーズ

灯を消してからが本当の涙なる

女の子すえ恐しいこと尋ね

恋のない女と見えて口を開け

相聞歌女の方だけ気にかかり

寡婦として渡りに舟は世にはない

若本 多久志

有為転変信じるものは己のみ

老骨と自称 ネクタイは派手にする

石仏を巡ればすすき秋深む

老い静 秋の深みに心澄む

施しの喜びジーンと心満つ

尼 緑之助

在位五十年どんでん返しが噴き上げる

列島の黒煙 地球は休まない

保革とか称し歴史は繰り返す

短篇を何冊か持ち話好き

OLの情報交換過疎地バス

浜田 久米雄

会者定離險の奥の顔となり

秋深く煎じぐすりがよく匂い

酷のない酒ほどほどに切り上げる

台風が去る秋空の阿呆らしさ

避難しに行く川柳書重たすぎ

本田 恵二朗

朝顔と夕顔みたいな共嫁ぎ

老妻を吹き出させたり古日記

ジープの脚は投げ出すように出来

山せまる里の民話に聞き惚れる

暮れ急ぐ里の小径のわらべ唄

正本 水客

男いっぴきへ大空が落ちてくる

鮎の眼のきつき縄張り出よとせず

虹の大きさを話す相手のない旅で

登るにつれて富士の高さが見えてくる

肩叩くのは味方とは限らない

橘 高薫風

ペン握る指のかたちも枯れはじめ

エリートに狐が落ちた獄の顔

落魄のわが身から出た屁の臭い

罽雲 奴は精神貴族だな

頂上に汗ひく顔の謝霊運

川村 好郎

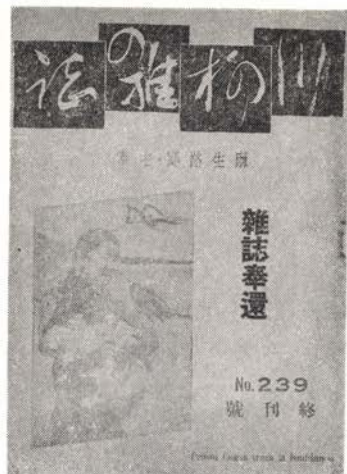
これからが追伸今日は何と書く

ひとり飲む女の時計に針がない

一線を引けば冷たい人にされ

力んだり妬いたり私涸れてゆく

騒音もよしみんなが生きる音



麻生路郎物語

(23)

「川柳雑誌」戦時奉還

東野 大八

五十台に入った路郎の耳にやがて戦争の軍靴の響きは次第に高まりをみせはじめる。

昭和十五年、路郎五十三歳、時に建国二千

六百年記念の年に当る。川柳雑誌もその記念

号とし、前線将兵の活字創価に慰問品として

大量に寄付。またこの年の九月号は川柳創刊

二百号記念にも当たっている。建国二千六百年

奉祝・創刊二〇〇号記念を九月十五日三越八

階大ホールで開催。盛況を極めたところ。また

十一月十二日堺市の婦人団体に「戦時婦人

生活確立講演会」で熱弁をふるい笑いのうち

に趣旨を貫徹好評を博す。以上を中心に路郎

の川柳活動を真黒になる程、詳記した山雨楼

メモにはつぎの如くに記されている。

「こしはよく働いた。働いて、働きぬいた。

スリ減ってしまうんじやないかと森東魚氏

や蛭子省二氏が案じてくれるほど働いた」

「私の無帽時代はかなりながく続いたが、

十五年の暮、娘が帽子を買ってくれたので、無帽時代に別れを告げ、戦斗帽を愛用することになった」

戦斗帽に国民服、いわゆる川柳報国をスロ

ーガンに、雑誌編集も講演日程も塗りつぶさ

れる統後の緊迫した毎日昭和十六年に入り

川柳の全国支部も、統廃合が続いていく。

「五月七日大阪府警察部特高検閲課から指

示があり、柳誌統合問題は、川柳雑誌」と、

番傘を残すことを容認され、昭和川柳、

川柳春秋、東煉瓦、天守閣、つるは

し、は統合または廃刊することが決った」

この年のことかと筆者は記憶しているが、

森鷗牛主宰の「三味線草」が井上信子主宰

「巻雲」中の鶴彬の

一手と足ともいで丸太にして返えし 彬

一萬歳と必死に叫ぶ自己欺満 〃

などの一連の作品を反戦川柳と指摘してい

る。この消息を筆者に伝えてくれたのは和田

黙然人で、そのときの言葉を今も明確に記憶

している。（在時、筆者は在北京）

「川柳人同志が非国民呼ばわりで争いを起

すなどとはもつてのほか、それまでは俳句弾

圧一辺倒だった特高の眼が川柳にも光り出す

ことになった。川柳受難の幕があらわれた

この話のあと北京川柳会の席で某から

「王将は一番色の白い駒（詠者失念）

がその筋にひっかかったことを耳にした。

「川柳雑誌・四〇〇号記念特集」の座談会

につきの個所がある。

路郎 川柳塔の句が検閲にひっかかったり

特高へ呼ばれたりしたが、最後まで始末書

書けといわれても書かず頑張り通した。

古方 私の句もひっかかりました。

「一寸だけ喋るに役人供をつれたったこれだけの句ですのになあ。あの時

は先生にえらいご迷惑をかけたものです。

路郎 検閲にひっかった川柳塔のページを破いて発送したりして苦心をした。戦地へ送ったものまで返送させよというのだから手のつけようがなかった。短詩型の雑誌で有保証は「川柳雑誌」だけなのだから自由にかけるのだが、進駐軍が来るまではやはり言論の自由はなかったわけです。

大東亜戦争はすではじまっていた。戦局の様相は、一段と深刻の度を加えていった。さきの座談会の記事にもう一度還そう。

葉 昭和十七年十二月本社句会は、大東亜戦一周年記念川柳大会。として御津八幡宮で開催、その翌年の創立二十周年記念南方動物川柳会を天王寺動物園で四月にもち、翌十八年六月に、食べられる雑草の吟行を南海高野線郊外で催したところには、戦局も否ばしくなくなっていました。

古方 雑誌奉還はいつでしたか。

路郎 私の肚は昭和十九年の十二月号ときまっていたので、募集課題も十二月号でキチッとおさまるよう編集にも苦心しました。紙やインキの欠亡からとはいえ雑誌奉還を発表したときはみんな暗然とした。それまでには柳誌にも合併という統制時代があったが、わが川柳雑誌はその憂き目を見なかった。しかし物資の欠亡には勝てず、ついに奉還することになったのです。

「川柳雑誌」雑誌奉還は昭和十八年十二月号であった。その終刊号のナンバーは二三九で、岩崎柳路のカメラによる蒙古人の少女の微笑がその表紙を飾っていた。路郎にとては笑うべきでない微笑をへだてて千万無量の想いが、その全誌にこめられていて。文中の庄巻は、苦斗四十年。と題するわずかに四頁に圧縮された川柳生活四十年の回顧である。この一文は、すでにこれまでの各篇に適宜抄録したので重復を避けるが、路郎にとって「川柳雑誌」の終刊はまさに劇的な体験であったことは言うまでもない。

その終刊号の開巻へき頭にこうある。

戦局は一寸刻みに緊迫して行く。雑誌などにぶら下っている時ではない。文化は第二陣だ。雑誌なんかは深く投げ出して直ちに戦斗配置につくべきである。それこそ我々に課せられた重大使命であると観する。

ここに本誌は自発的に巻を閉じることとした

みたみわれ 大君にすべてを捧げまつらん

この号に、これまで絶えることのなかった路郎の作品は全誌を通じて一句も見当らないことが注目される。

この終刊号のなかの「回転椅子」（編集後記）に、路郎生でつぎのように記している。

★「川柳雑誌」のために、私自身が終刊号

と云う文字を書くなどとは夢にも考えていなかった。「川柳雑誌」に終刊号と云うものがあっては、おそらくそれは私の死後だと思っていたからである。

★しかし、その時期が予想以上に早く到来した。しかも私自身の手で終刊号を世に送ることになった、真に感慨無量である。

★私のガンバリズムをよく知っていられる社関係の人々並びに愛読者諸賢が、本号を手にしたならば、事の意外に驚かれるに違いない。たしかに私は頑固なことにかけては人後に落ちない方である。殊に幾度か死に直面し、妻子の衣食を削ってまでも「川柳雑誌」の刊行を続けて来たことを思えば、創刊以来満二十年後の今日しかも社運隆昌、最高峰の柳誌として、何等後顧の憂いのない時において、そうムザムザと廃刊すべきでないことぐらいいは百も承知、二百も承知ではあるが、あらゆる事情を超越して廃刊の挙に出なければならぬ場合が只一回ある。それは国家興廢の時、すべてを国家に殉じて皇恩にむくゆる時の謂である。

★本誌は今、その只一回の廃刊の時期に遭遇したのである。諸賢又欣然として諒恕されることを疑はない。

★本号は例月の倍大号とした。しかも殆んど私一人で筆陣を張った。それは横暴心からではない。後かたづけの意味からである。これまた寛恕を請う次第である。

終刊号のなかの「飛燕往来」は、全国柳人の来信の報告だが、三頁におよぶその通信による廃刊についての会合の議事録が送付されていたようだ。

「不朽洞総会議事概要『川柳雑誌』奉還（一同無言、暫時静寂）私もこの文字で睡（つば）をのみました。刊行を続け得られる実情にある事は部数の量で『川柳雑誌』が第一線に立っている事を示されて居ります。だのに奉還を決意されました事に、先生の並々ならぬ御心情をうかがい知ることが出来ます。存続に対する力の限りと沸きたぎってきた熱情は身心が灼ける想いでした。それらはすべて先生が身をもって幾度も耐え、噛みしめて崇高な奉還の決意に到達せられたことを落着いて始めて知りました。お国の為先生良くお決心下さいました。唯々頭が下るのみであります。」（川口市・伊古田伊太吉氏より）

「噂にきけば、この度『川柳雑誌』をおやめになり川柳講演にお尽くしになる由。山口草平先生より洩れ承り、まことにその悲壮なる御決心にうたれ、紋太さんとも相談の上われわれの会合へでも御出席の上、一場の御教話を拝する事ができれば非常に結構な事と存じますが御意向は如何で御座いますし。小生も正月五日より節酒（断酒に近い）を実行。大いに人間らしい生活をとみなたく決心いたしました、そんなことよりも何より、一度しみじみと二人でもお話しできるならば、魚崎へでも御来駕下さるようお願い申上げます。奥

さんはじめ皆様にもよろしく。

（兵庫県・住田

乱氏より）

「柳界の変転心にしたむ時です。小生も今年から魚崎町役場へ勤務するようになりまして。一度御来遊下されば幸甚です。もめんの運命もほとんど絶望で目下推移に委す他なき状態です。こうなると人懐かしい気が起ります」（神戸・相元教大氏より）

「大阪時事の社長の好意で新聞の特派員として北支蒙疆の旅をやる。費用の面倒はすべて張家口にいた岩崎柳路君が見てくれた。帰阪後も紙の割当は減少するばかり、生産的なものの出版をすれば紙はやると言ってくれるが私は文化の仕事をしているので、儲りさえすればいいというのではないから、紙がもらいたいためにその方面の刊行へ転じるということとは思ってもよらないことであるといって断固として応じない。そのため配給の紙は蚊の涙ほどしかくれない。やむなく紙のヤミ買いをして刊行をつづけた。

男の子はみな応召したので、五女の梨里が闇紙をリヤカーで印刷屋へ運んで一カ月の遅刊もなく刊行を続けたが、国内事情がますます緊迫してきたので、遂に発行をやめたらどうかとの勧告さえも受けた。

主婦の友のような大雑誌すらみる影もない薄っぺらな貧弱な雑誌になつてしまった。ガン張り通してきた『川柳雑誌』も昭和十八年十二月号限りで潔く廃刊を決意し、堂々た

る「奉還号」を出して影を没した。」

（川柳雑誌No.362・古稀特集号・麻生路郎）

雑誌奉還号から右の古稀特集号まで、十四年の歳月が経っている。この老齢の感慨の眼が痛苦にみちた川柳の廃刊という生涯の一大試験をふりかえったとき、川柳の停刊は、雑誌発行の上で最大の資材である用紙不足が最大の壁となっていたことを物語っている。いわば川柳はその糧道を断たれたことによって廃刊に踏み切らざるを得なかったのである。奉還号の「苦斗四十年」の血を吐くような川柳生涯の回顧の中で、路郎は「紙」不足が原因だとは一言も触れてはいない。戦時下だけにそのようなことは活字ではタブーにちがいないが、その回顧録のしめくくりには彼はこう書いている。

「最後に近衛内閣の新体制当時、大阪における柳誌の整備統合に就て懇願をうけたが、我誌だけは唯一の有保証新聞紙法に拠る刊行であり、職業人として立っているのでアマチヤの柳誌とは全く別箇に考慮された当局の措置を今もなお感謝していることを付記したい」

廃刊に当たっての彼のプライドと気性の一端がよくにじみ出ている。

「麻生路郎物語」次号予告

『戦争と路郎一家』

ご期待ください。

俳風柳多留廿五篇研究

— (十二) —



室 山 三 柳

青木迷朗・西原亮・鈴木黄
室山三柳・入江勇・清博
八木敬一・紀内恒久・岡田甫

213 こんなにやくも鴨に入ればひんかよし

青木―品が悪いこんにやくとは味噌田楽のこんにやくを指すのであろうか。品の良いこんにやくは鴨鍋に入れる白滝（糸こんにやく）をいうのであろうか？

西原―鴨鍋の事で、こんにやくの中へ鴨があるより、鴨の中にこんにやくがあるのがよろしいというだけの事である。

室山―西原説賛。豆腐との対比であらう。

八木―こんにやくは、余り品のよい食べ物とは考えられていなかったのではなからうか。

その原因は、一つには足で踏んで作ったからかも知れない。

こんにやくや桶でちんだ踏んでいる

四五・9

しかるに鴨はごちそうであるから、鴨鍋に入れると、こんにやくまでも品がよく見えるというのであろう。

紀内―八木氏説に賛。

岡田―同。

214 秋葉ハれふるこんひらハ見るばかり

青木―主題句は鯉を詠み込まぬ謎句。秋葉権

現のそばの川魚料理屋（葛西太郎、武蔵屋権三、大黒屋孫四郎など）では、鯉の料理を食わせるが、虎の門から新橋にかけての堀の名物の大鯉は観賞用であるという句。

魚淵におどる十日の人だから

二二・16

―毎月十日が金毘羅宮の縁日。
太郎からべらぼうとなり川をこし

二五・22

―葛西太郎で一杯きげんとなり、吉原へ繰込む。

室山——同。

大きな鯉がいると金毘羅参り

第一・27

いまでも虎の門の金比羅様の池には鯉が多い由。

紀内——同。「鯉」という語を出さずに表現したところがミソ。

岡田——同。虎の門の琴平神社には、室山氏の云われたように、池に鯉がたくさんいました

(これは昭和十年ごろの所見。現在は何?)

215 花嫁をしちやの庫でふんで見る

青木——持参嫁の衣類、諸道具を入置したのを質屋ではいま迄蔵に入ったものがどれ位の金額であったか、ざっと値踏みしたというのであろう。

西原——まだ入置はしていない。持参分を質屋の蔵を標準にして値ぶみしてみたら、というのであろう。よって、余程の持参嫁ということになる。

室山——西原説賛。しかし「花嫁を」であるか

ら、即ち花嫁の衣類・諸道具とするのもいがかと思われる。とすると、礎稿の入置説も捨て難くなる。ともかく、品物によって花嫁の品定めをすることは動かないだろう。

八木——持参(醜婦の意味の)と限定せず。質屋の蔵の中で、入置されたどっかの花嫁の衣裳等を見て、「これは大した財産家からの嫁だ」「これは貧乏人の嫁だ」など、無責任な評と想像をたくましくしている図。

紀内——西原氏説賛。「花嫁を」は「花嫁をもらうこと」によって付いてくるものすべて」を象徴的に表現したものであろう。

岡田——やはり衣裳。(疊んで風呂敷に包めば人目につかぬから。)また八木氏の触れられたように、持参嫁と限定する必要はない。

216 傾城八空言女房小言也

青木——岡田先生の『川柳絵本柳樽』

の註に、「遊女の甘い空言にデレデ

レして家に帰ると今度は女房のこわい小言を聞かねばならぬ」

とある。女房の小言とは、この場合「格言」をいうか。

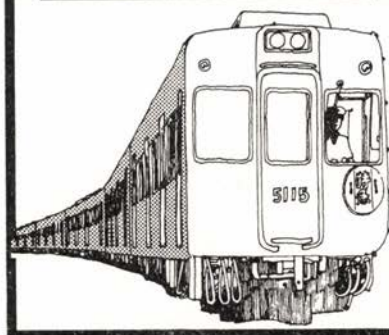
西原——賛。空言と小言のしやれだけ。

岡田——同。

「俳風柳多留二十五篇研究」のバックナンバーは一冊につき送料共百五十円でお送りいたします。ただし残部僅少につきお申し込み順といたします。——運営部——

大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ

阪急電車



同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

過去はむくろよ喜びも悲しみも

工藤 甲吉

むくろ——なきがら——死骸。過去はすでに死骸だ、過ぎ去ったことは、くよくよ思っても所詮帰らない。喜びも悲しみも亦今から始まる。と私はそう解釈してみた、それは過去はむくろよという、よの一字からである。その喜びは、次の句の、家中が心寄せ合い西瓜割るであり、悲しみはその次の句、胡瓜もみ今やこの世に妻は居すである。作者は奥さんを歿くされて、今年三回忌をすまされた淋しい生活をしてられるが常に奥さんのことを忘れず作句されていられる毎月の秀句に敬服しているものである。

蜜蜂は採って来た量を自慢せず

吉田圭井堂

人間の世界にノルマという言葉があった、

保険会社などでは事務所に、グラフを書いて支店長が督戦している。然し蜜蜂の世界には自分は自分なりの蜜の量を稼いで来て、達観を我々に教えた一句である。

首塚の主が変身黒揚羽

香川 酔々

白雨は去った。閑かな緑濃き首塚の前に立つた作者が——首塚の主の遐想に耽っている、突然黒揚羽の蝶が、首塚の頂より舞い上った、作者は一瞬、首塚の主が黒揚羽となつて翔んだと連想した。黒揚羽の首の辺りの黄色も鮮やかに臉に残る魔性的情景である。

四季の国匂い忘れた花もあり

大峠 可動

春夏秋冬を誇る日本の国に咲く花に、公書の為か匂を失った花のあるのを作者は、もありというてゐる。之は正面から見た解釈で、ウーマンリブ、男女同権、OL貴族などと、一部の女性が、形許り綺麗に飾って、匂いを忘れた近代女性を揶揄した一句である。

ほろんほろんと音を輪切りにしてハープ

小砂 白汀

ハープの音を輪切りという言葉で上手に表現している。唯それだけというてしまえば、川柳の視野が狭ますぎる。こういう川柳も亦海に捨て難い、何も切実な事のみをいうて、独善的なのが川柳ではない。読んでみて上手に言うてある、面白い、と人を喜こばすのも

亦川柳である。

淋しさも不安も寡婦の軍手干す

大塚 豊生

この寡婦の労働は軍手を使う仕事である。だから過剰な労働である、でも賃銀が少しでも良い方を選んだのであろう。すり切れた軍手を何回も何回も洗って、裏長屋の余り日のあたらないところに干してある、寡婦という運命に、経済の不安、将来の心配、相談相手のない淋しさ、そんなものが下五の軍手干すに切実に詠いあげられている。

その他チェックした句

そのままで散りたいだらうカンナの朱

三宅 不朽

射程距離にライバルがいるゆとり

岩本雀踊子

妻そつと蜘蛛を逃してから掃除

堀江 正朗

冷汗も高等動物だからかき

西森 花村

動く歯も舌に親しきもののうち

山根 白星

口やかましい妻で夏瘦などはせず

野田素身郎

三面鏡いつまで騙し通せるか

時広 一路

真実を盛った予算は組みなやみ

竹中 肖二

同じ汗かいても私キャデーです

梅谿庵不醉

昭和の間を雌鳥が告げる

塩満 敏

水煙抄

秀句鑑賞

前月号から

谷垣史好

心にも欲しい小さな換気扇

鈴木かつ子

いつまでも心の底に滲んでいる気分というのはイヤなもの。気分転換の早く出来る人は羨しいと思う。でも小さな換気扇でも、それを回すのは、やはりあなた自身なのです。

門からは幸せだけが見えている

岩下照沖

この門が他家の門だとすると「となりの芝生」と一緒で、とりたてて新味があるわけではない。そうではなくて、これは、「うちの門」なのである。家の束縛から脱れて自由な世界へ飛び出したいと願いながら、思い切って門を出て行く勇氣もない。やりきれない気持ちで門の外を眺めていると、狭い視野の中を往き来する人達はみな幸せそうに見えるのだ。

人間の都合でダルマ片目なり

小山内貞男

お前さんはいいよ。先生が当選されて両目を入れてもらったんだから。

——そう云えば君とこは残念だったナ。惜しくも次点で落選か。

——だから未だに片目ってわけさ。

でも、俺のこの目を見てくれ、ひどいもんだ。カメラマンに何度も何度も注文されて、そのたびに筆を入れるもんだから、こんなにイビツになっちゃって。世の中ともに見えやしない。

——ぜい沢云いなさんな。ダルマの気持なんか構っちゃられないんだよ、人間様は。

善人のその日その日を音立てず

大林曲ん手

靴底に歩き続けた悔いはない

高橋古啓

山本周五郎の短篇の主人公は、たいいてい律儀で、健な気で思いやりがあつて、だからこそ今なお多くの人に愛されている。いつの時代になつても善人というのは、そうして市井の片隅に黙々と暮しているのである。だからこの頃のように傍若無人な不協和音をまき散らす輩がふえてくると余計に腹が立つてくるのだ。

後の句にも下積みで甘んじる者のさわやかな誇りがある。

停電の闇 安らかになつてくる

桑原道夫

このような句に徒らな説明は蛇足である。試みに目を閉じて二度、三度とお念仏のようにこの句をつぶやいてみれば、あなたもおのずから安らかな境地に没入できるに違いない。何事も自然体、即ち素直であるのが一番いい。

平社員は机はどこにでも置ける

西本保夫

岳人君が山の句を作るずっと前から、この作者は平社員はの句を作り続けておられる。それはそれで一つの信念だと思ふ。平社員はの句は、ともすれば類型に陥りがちであるが、この句は面白い。サラリーマンは気楽な稼業、と唄ったのは昔々の童謡であつた。

人生の矢印 塾へ通わせる

岸本豊平次

子を持つ親の悩みの一つに進学の問題がある。学歴がものを云い、企業の終身雇用制が続く限り、識者が何と云おうとも進学競争に狂奔し、子供を塾へ通わせる。塾から始まる矢印が我が子のこれからの人生の最も安全なコースだと信じているのである。でも、子供の方は結構楽しく塾へ通っているようだ。

賛成の拍手膳立て出来ている

小山悠泉

株主総会などがその一例。要するに形式を整えるための儀式が必要なのだ。そして拍手の渦の中でほくそ笑みでる奴がいつもいる。



川村好郎選

羽曳野市 麻野幽玄

恋の詩せめて心に抱く若き
美しき惑い中秋の月仰ぐ
三面鏡視覚の嘘を写し出し
終局の旅路カンナの赤に佇ち
千羽鶴だけが知ってる末路の灯

三重県 川上富子

偶然が欲しくて女旅に出る
枯れること知らぬ造花の涙見た
ちぐはぐな歩幅に夫婦の距離がある
屈辱の日に札幌の夢を見る
不満ぶちまける日記があたたかい

和歌山市 西山幸

焦燥へ暦が大きい顔をする
縮りたい愚痴満月へ恥じる日よ
美辞麗句驕る野心と虚しさ
いつわりを強いられて咲く花の彩

柏原市 小谷葉子

敗者復活 人生捨てがたし

明日へ立ち向う人と約束などしない
黙って歩く夫婦のポーズとなつて
片蔭を歩く 人妻となつてから

唐津市 岩下照沖

萩活けてまだ焼酎の匂う瓶
杓下が洗いなさいと言う匂い
家計簿に億という数字書いてみる
新冷や茶筒を抜けば丸い音

八尾市 小川洋子

有頂天の死角に潜む落し穴
大企業 of 縮小贅肉は少し落ち
実直に生きて純白のままの椅子
朝七時狂想曲の指揮を取る

和歌山市 樫村ふみよ

言葉ない二人へ耳をすます星
花よりも青葉が旅へかきたてる
ゴミまでがつつましく出る寡婦の家

明日知らずシャキシャキ今日の米をとき

富田林市 中村 優

一服の紫煙雨中の白日夢

戯れの握手に甘い語が生れ

たとえばの語に反応確める

賞罰はなく一枚の紙白し

和歌山市 桑原道夫

心ほど揺れることないブランコで

少年よ泣くなら石を捨ててから

偽善者にたやすくなれるところてん

気に入った空間がある酔うている

西宮市 杉浦 婦美子

透明な秋をすくうている孤独

反旗チラリ妻切り口上になつてきた

自己嫌惡心に叛く昏よ

新宮市 西尾 功

蟬しぐれ忠魂の碑の叫びとも

こんな時母の墓石に問いかける

塾などと云うてやっぱり塾へやり

豊中市 安藤 寿美子

地獄絵をかいて自分でうなされる

秋の蚊も孤独か人に慕いよる

だまされているのも私の役なんだ

唐津市 三浦 ひろ坊

何となく賄賂のつもりお賽銭

無料検診で病人にされちまい
電照もハウスも知らぬ菊凛々

大阪市 芝原路春

背信をとがめて既に負けている

逆境にいるとき吾は花を持つ

水害のニュースカラーがきれいすぎ

寝屋川市 香川 亜成

大阪を一步も出ない俺の地図

決算がまだ片付いてない残暑

何もかも濡らし秋雨が快い

岡山市 時末 一灯

わたしから脱出 行先のないバスで

まっとうなぐらし歩幅の揺らぐ日も

通り雨 誰にも云わないことにする

岡山市 長尾 保

人を恋う夜ひたすらベン走る

美の追求やっぱり私も女です

一コマとなる今日のいのちへ小さき悔い

寝屋川市 柴田 恵美子

リンスしてびっくりする程木の葉髪

抱擁の背の手に発電するファスナー

持ち時間計算されている融資

大和高田市 岸本 豊平次

古里の山父になり母に見え

あきらめた心が夜半の秒を追う

軍歌から百恵の唄まで知った風呂

大阪市 那須 鎮彦

畳まれたかがしに明日の夢が無い

台風に勝ったかがしは斜め向く

凡人はかがしに似たり狭い視野

東予市 小山 悠泉

しくじりをみな踏台にした自信

平和だな妻の寝息に子の寝息

男には男としての守備範囲

鳥取市 有田 鹿の子

茗人師を偲ぶ

師の遺影今にも柳話がきこえそう

閨年二度くる十五夜を待ち侘びる

月の出ぬ今宵亡夫を呼んでみる

大阪市 平井 露芳

錦鯉お前もピーナッツ食べたのか

茶柱が立たず茶の葉が悪いから

石切さん漢方薬とも手をつなぎ

弘前市 小山内 貞男

鉢まれて松の枝振り生きてくる

叱っては見たが昔の俺に似る

蛇口からお湯が出てくる幸にいる

鳥取市 岸本 無人

餌代を知らず近所が腕をほめ

久しぶり腹をけられる孫と寝る

七草の一つが庭を秋にする

寝屋川市 江口 度

正確な時計で息がつまりそう

焼香の列黒々と続く義理

日本の四季へとけこむ黒瓦

高知県 瀬戸 海州

喉元を過ぎれば涙が嘘となる

伝言板の嘘見届けた日の妬心

序列などいらぬから行くクラス会

羽曳野市 岩崎 双虎

スト解除空気がうまいものと知る

大根を蒔く気難草はそのまんま

労資妥結屋上に出た深呼吸

北九州市 三上 春雄

年金で遊ぶと無職は胸を張り

適材が適所におったつまみ食い

ドラマでも義理人情に湧く涙

竹原市 鈴木 かつ子

夕立ちを忘れたような虹の色

夏休み起床ラッパのほしい朝

母の日は嫁に貰うた服を着る

岸和田市 池田 露子

四十妻寒熱二つ持って生き

生きたため女は針を隠し持つ

宿チップ妻が半分取上げる

西宮市 山田 喜代子

六十になって今まで何をした
出る頭叩いて謙虚の顔になる

澄んだ目に映れば人の世もきれい

長浜市 白木 まつゑ

自己嫌悪あゝ白菊の清らかさ

四面楚歌のがれて独りホームの灯

長雨に老いの秋思 視野ぼける

吹田市 藤原 世史春

かも知れませんが予報の逃げるみち

松茸とは紙のような薄いものと知り

染めているのにつかりヨイショと声を出し

泉佐野市 大工 静子

肌着干す竿掛けそこね桃の熟れ

ネット出し置き忘れたる旅の朝

備前市 武内 雅堂

芯の強さ見せ渴愛のネックレス

今宵また絵馬の下なる旅の僧

大阪市 欄 蘭

負け犬になってシャワーをやけに浴び

熊本市 有働 芳仙

夏季休暇終り一家支える顔になり

不用意に吐いた言葉に咬みつかれ

和歌山市 松原 寿子

振り向くまい小さな足跡消えるから
ペン重く半期を綴る原稿紙

東大阪市 崎山 美子

まっ白のエプロン妻という誇り
媚を売る女も心にほこり持ち

島根県 松本文子

耐えて来た涙テレビに泣かされる
俺に似よ似るなと云える子が欲しい

尼崎市 中谷 利美

捨て石がやっと終盤ものを言い
退院が近く見舞が急にふえ

七尾市 松高 秀峰

一筋の道に叙勲の陽が当り
公民館寄附する人の下心

大阪市 牧 ときを

友来るとバラにも告げる老の日々
しばらくは止めておきたい流れ星

竹原市 鈴木 かつ子

合掌の手からこぼれた愚痴一つ
反省のあとから愚痴が追うてくる

青森県 波 ただお

大空に銀鱗躍らし心満ち
平凡を何時も妻に叱咤され

竹原市 大島 花炎

海鳴りが還らざる女連れ戻し

スタイルへ無理と承知のニールツク

堺市 吉田 朋子

チンチロリンかそけき命にこめる虫
星一つ月と並んだ秋の空

今治市 萬本 昌道

孫までが客に馴染んで小商い
小商いレジャーを客に縛られる

倉敷市 藤原 健二

盃に捨てたい面影また浮び
蓮の花蓮の臺を信じさせ

島根県 岩田 三和

切られてものびる命芋は持ち
サメに勝つイワシの群を育てんか

倉敷市 松井 俊風

手鏡に秋晴れ映し病んでいる
酔うほどに肩書き邪魔になつてくる

寝屋川市 福富 隆子

ゼンマイが切れて夕方へたり込む
健康な夏をウエストきつくなり

尾鷲市 渡辺 伊津志

愛猫と同じ姿で妻が寝る
遙かなる思い出磯の香と遊ぶ

亀岡市 森 和堂

庶民には分からぬ手品の政党劇
青中老最後の花道何色に

八戸市 島田 昭治

老いて子に従がぬ母もて余し
金儲け嫌いとは驢下手なだけ

今治市 大本 バット

地下鉄の迷路が方向音痴にし
飲むだけの金は工面がつくらしい

今治市 伊藤 一郎

運動会寄付するだけの老夫婦
東京で並び大阪で割り込まれ

今治市 真山 国彦

老人の散歩トレパン派手な色
未だ死ねぬ未練がヘルスメーターに乗り

今治市 今井 松花

川霧は昔のままの宇治の里
茶の味を覚えて宇治の旅終る

今治市 古野 伶人

心ブラの思い出の店消えて居た
公害の罪はイエスも知らぬ事

橋本市 岩倉 天彦

目くばせをして二次会へはずす席
済みませんぐらいい間違ひ電話言え

大阪市 村島 秀村

宴果てて幹事お茶漬食べて幕
大都市の人は果箱の鳩に似る

大阪市 須浦 つね

米洗う水のつめたさ秋に会う
米価高云いつつ御飯する人

大阪市 前川 玉子

大都市に住んで裏町袋貼る
早場米見習ってくれ我が娘

大阪市 内藤 ますえ

米の値に直して回りくどい物価
人間が地下で生きてる大都会

堺市 堀 畑 日々子

ぼっくり寺八月休みと書いてある
ぼっくり寺女のトイレの増やされる

鳥取市 勝 山 紫 宏

晩酌の手綱を妻に任せてる
家計簿にぎっしり愚痴の種を盛り

松江市 梅 本 登美也

即答をさけて車上の人となり
おもちゃ箱うちべんけいの子が育ち

八戸市 安 田 紘

ワキ役の喜び抱いて生きている
子ゆえの妥協あとから腹が立ち

鳥取県 福 田 保 子

非番日の夫へ騒ぐ子叱りつけ
新装へ女のれんを守り抜き

堺市 栗 本 藤 持

静かなる流れの音に明治あり

極楽に一足入れて夢は消え

大阪市 野 田 君 枝

尻込みも恋の弱味と言うものか
本心を打ちあけられた目のやりば

名古屋市 山 谷 半 蔵

生活を賭けたパチンコ楽でない
酒ならば入る胃袋別に持ち

宝塚市 吉 田 笑 女

テレビから目は放さずに小言きく
めつきりと白髪老夫のうしろ髪

大阪市 新 川 貞 祐

家賃ほど年金が来る有難さ
それぞれに持ち物分けるのも齡か

鳥根県 飯 塚 虎 秋

屈辱に耐えた心が実る秋
みの虫を見ると汚職を思い出す

岡山県 池 田 半 仙

八合目自信過剰を足が知り
妥協した私に意地が攻めてくる

須賀川市 平 栗 金 太 郎

トラックが宿舍にもなる露店商
鯛焼も泳ぎたそんな秋祭り

山口県 高 崎 雀 声

みえすいたウソのお世辞も聞いておく
栄転を隣りはほっとしてる仲

松江市 黒目 大鳥

馬耳東風鳥のごとくに飛んでみん
月掛の保険汚濁の世を知らず

尼崎市 駒村 岳麓

妻病みていいよいいと米を研ぎ
なぜ云わぬ遠慮の妻に買うリング

出雲市 藤井 晴月

底辺で銭のおもみをしかと知る(火災によせて)

姫路市 大原 葉香

古色然と寺の屋根あり村平和

出雲市 板垣 夢酔

もたれくる女の裏を知って負け

大阪市 堀口 欣一

議員会館の中に鍼灸治療室

羽咋市 三宅 ろ亭

病む母のかぼそき声を顔で読む

新潟県 高野 不二

ご馳走になるから聞いてやる自慢

大阪市 休庭 一休

大都市のスモッグよそこに家は建ち

大阪市 山本 灯斉

大都市のビルの谷間にも秋が来る

橋本市 田中 恒治

新米も古古米もない食い盛り

大阪市 中辻 千子

連想は仕合せばかりつづくなり

橿原市 西本 保夫

後進に残してやろうか失敗談

東大阪市 浜地 清松

新米が毎年とどく律儀者

八尾市 田中 紀美代

敗北と見えぬ青春の詩がある

郷愁に誘われ買うたハッタイ粉

東大阪市 加藤 千代子

離れても電話で愛を確かめる

河内長野市 井上 喜酔

回答案衆智あつめ練り上げる

兵庫県 高橋 近江

バーベキュー楽しむ友の輪を拡げ

羽島市 伊藤 静枝

風鈴がせめても涼しさ誘う病床

鳥取県 加藤 茶人

方向音痴にさせ都会は夕暮れる

広島県 原田 篤史

愚痴っぽくなったと妻は酌を逃げ

岡山市 井上 柳五郎

老化する脳に苦作で刺激する

松江市 岡崎 雪美

何のため協力一致か自民党

唐津市 桑原 掬治

法師蟬残暑むさぼるように鳴き

唐津市 田中 紫浪

日ぐらしの輪唱に明く高千穂映

唐津市 岩崎 實

火星また仮面をぬいだ夜が来る

唐津市 松垣 岩光

政治献金ですよとすます三分の利

唐津市 山下 勝一

漬物は石の重みに耐えて生き

唐津市 田口 虹汀

ほどほどにせねばならない垣根越し

出雲市 高見 鐘堂

岸和田市 池田 香珠夫

近作

朝刊を提げて急かれる膳へくる

上田市 金子 呑風

もう一度歌舞伎を見たい国の母
餅米をいつかの用に母しまい

名古屋市 鈴木 可香

曼珠沙華日の短かさを母が言う

伽羅の香をこめて茶室のたなずまい
納骨に来て客殿で茶を招ばれ

大洲市 米澤 曉明

金づるが切れて浮足立つ味方

大阪市 文川 一念

世界地図戦禍の跡は残ら無い

大阪市 文川 野生

豪快に笑うてみよう淋みしくて

豊中市 高橋 古啓

余裕綽々まだ続編があるのなり

青森県 荒田 つる

さりげなくとぼけて探りいれる気か

今治市 園部 正則

屋根の雨到着順をくずさない

豊中市 出口 セツ子

人生の虚無馬券の紙吹雪

食卓へもう医師でない親に酌ぎ

灯台の光りも澄んだ秋の色
竹原へ川柳塔に逢いに行く

岐阜市 市川 鱗魚

地下足袋で稼ぎお金に貌がある
そり返る訳でござなくひき蛙

夏ミカンむく不器用に目立つ腹

今治市 長野 文庫

正直さねじを巻かれただけ動き
土器石器箱に小判のシヨベルカー

無い知恵が更に底つく歳となり

百人一首と川柳

(29)

富士野鞍馬

九二 二條院 讃岐

わが袖は汐干に見えぬおきの石の

人こそ知らねかわく間もなし

この歌は「石に寄する恋と言へる心を」として「千載集」にのっている。恐らく題詠であらう。

讃岐へも水の流るる落し胤

市風 (三八三)

人こそ知らね頼政がむすめ也

三交 (二六二)

讃岐は、源三位頼政の娘で、若くして二条天皇に女房として仕え、右の歌を詠んでから有名になり「おきの石の讃岐」と呼ばれたのである。

頼政の死んだ治承四年(一一七九)には、

中年であつたと推定でき、建保四年(一一二六)の百番歌合せに出詠しているから、相当

長命であつたと想像できる。

川柳はまた、この歌の文句をとって、

きようげんと思ひながらも沖の石

(拾九)

人こそしらねかわく間も嫁はなし

首裏 (四七三)

新しいうち女房は沖の石

(末三)

人こそ知らぬ内証は火の車

十九九 (四〇八)

などと詠んでいる。なお

二条のきんたぬきと下女おぼえてる

三箱 (二四〇八)

と、歌カルタの戯作もある。

九三 鎌倉右大臣

世の中は常にもがもなきさ漕ぐ

あまのをぶねの綱手かなしも

(新勅撰集)

鎌倉右大臣は、源実朝のことである。頼朝の次男で、十二才で兄頼家の後を継いで、征夷大將軍となり、二十七才で右大臣に任ぜられた。その翌年、建保七年(一一一九)一月、鶴が岡八幡宮で拝賀式の帰途、甥の公曉に刺されて、二十八才が最後であつた。

つるが岡だにたん命なうだいじん

(天五義一)

あつけない右大臣だと政子泣き

(九)

秋田 實主宰・不二田一三夫編集

漫才 第4号 十月末発行
定価三百円 千二百円

〒544 大阪市生野区勝山南1の14の17

漫才作家くらぶ

右大臣になったのは、前年十二月二日だから、正に「あつけない」である。政子は母である。

百人一首弓箭筋も一人あり

(二一五)

おいに首とられたも有百人一首

(天八12・5)

「弓箭筋」は剣難の手相で、公暁に刺されたことを諷している。

百人で九十九人は病死なり

(安八松3)

九十八人はたたみの上で死に

(安三仁5)

百人のうち畳の上で死ななかったのは、この実朝と、唐で死んだ阿倍仲磨との二人である。

京談に關東べいも一首まぜ

玉川(宮二9)

定家卿白歯の右大臣も入れ

山路(宮二37)

右大臣として京都に居たら歯を黒く染めるのであるが、実朝は鎌倉に居たので染めなかった。

百人一首かまくらからも口を出し

(明三信1)

百人のうち一人食ふ初鰯

芥丈(二三33)

「鎌倉の沖よりいずる初鰯」といわれてい

たので、実朝だけが食っただろうと洒落ている。

小坪坂実朝公の御生国

木賀(八七3)

彼の石は実朝公の御奉納

志水(四〇22)

小坪は子壺の洒落、石は鶴が岡に女陰の形をした「陰台」(政子石、姫石ともいう)というのがある。

実朝は、歌を定家(九七)に師事したが、後、万葉に学んで、家集「金槐集」に多くの名歌を残している。

かまくらで大きな舟をつくるきた

(安七松4)

実朝は、入唐の計画で、大船を造らせたが、遠浅で下りず失敗した。

九四 参議雅経

みよし野の山のあき風さよふけて

ふるさと寒くころもうつなり

この歌は「新古今集」にあり、作者藤原雅経は、刑部卿頼経の子である。左近衛中将だったが、承久二年(一二二〇)参議となり、その翌年五十二でなくなった。

歌は俊成(八三)に学び、飛鳥井家を建

て、新古今集の選者の一人である。
この歌の文句取りに、

ふるさと寒くむく鳥ハ巢立也

小蝶(八三27)

古里寒く大飯を喰ひに来る

(三一2)

という川柳がある。これは信州から江戸へ出稼ぎの男で(むく鳥)大食の定評があった。また、

お気に入り古郷寒きをんななり

集遊(傍四14)

妾が親古里さふくねだるなり

シクト(三五22)

は越後娘である。

黄銅六角ボールトナット

及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL (06) 三四五二〇四

夜間 (06) 四四〇八

愛染帖

正本水客選

振り向けば我が影のごと妻も老い
鶏頭は土の血のほりつめし色

唐津市

岩下 照沖

私の過去の貌いくつかの落葉舞う
夜の秋下戸にも酔える酒が欲し

竹原市

三宅 不朽

わかつてはもらえぬ損な鬼の役
弱肉強食組板に鯉はのる

青森市

工藤 甲吉

あなたの椅子をいつも右に空けておく
駄目な私に一番似合う月見草

柏原市

小谷 葉子

おしゃべりの枕よ今夜も夢をくれ
酔い醒めた時には出口のない酒場

京都市

都倉 求芽

忘れられた玩具 芝生で花になる

寝屋川市

宮尾あいき

職安に行く日を避けて小旅行

今治市

伊藤 一郎

門灯がついてる母が待っている

鳥取市

勝山 紫宏

飲むムード忽ち出来て栓を抜き

今治市

大本バット

ほんとうに耐えているのは足の裏

八尾市

大路 美幸

酔いどれに成ってひと時反抗す

和泉市

西岡 洛酔

傷心の旅は尾花がうとましく

大阪市

神夏磯道子

幸せの汗 太陽に覗かれる

和歌山市

沢山 福水

悪友が待たれる顔でやってくる

和歌山市

若宮 武雄

伏して泣く童女におんなの性を見る

八尾市

高橋 夕花

太陽の回りを地球が駆ける音

島根県

錦織 文子

OKと真顔で答える祖母がいて

京都市

松川 杜的

舞上る風船もあり秋まつり

唐津市

松垣 岩光

台風を稲田ざわめきあい耐える

枚方市

宮川 珠笑

よく稼ぐ蟻は列からはなれてる

八尾市

宮西 弥生

エンゼルになれぬ金魚の小さい死

八尾市

香川 酔々

天国の道は地獄の底にあり

尾鷲市

渡辺伊津志

幸せの鍵を握って主婦多忙

島根県

堀江 芳子

遠い耳 時には処世術となり

唐津市 岩崎 実

もの言えば愚痴の出そうなのどぼとけ

島根県 飯塚 虎秋

螢光灯ヒリヒリヒリ私かも

豊中市 戸田 古方

一と雨の来そうな雲に出る機影

尼崎市 黒川 紫香

雄雌の区別はいらぬ蠅叩き

島取市 河村 日満

命拾いをしたのは横着ものの方

岡山県 直原七面山

真相へ聖徳太子がマスクする

大阪市 川口 弘生

勝つ喧嘩つまらないからやめておく

八戸市 紅 葉山

商品にすぎぬ女の飾りすぎ

堺市 高橋千万子

流される造花どこまでゆくんかな

東京都 山根 白星

命綱にナイフを当てて見たい ふと

伊丹市 榎谷 漫柳

火葬場の錠前ぐさり胸を刺す

和歌山市 野村太茂津

なだらかな老いだよロバよ泣くでない

島根県 小砂 白汀

水に浮く月をおどかす火振漁

高槻市 若柳 潮花

ミサ了えてのんびり神父と飲める仲

松江市 黒目 大鳥

児をあやす娘の手あふなし親の目に

島根県 堀江 正朗

漢文に理路整然とある余白

豊中市 最後まで焦点ずれたまま話し

貝塚市 やけで飲む酒は女の手をかりず

小松市 稲妻を待つて夏のアドバルーン

和歌山市 現実を見るが恐くて騙される

豊中市 野仏の話しかけたい目に出会う

和歌山市 老いて今 横の絆の強さ知る

大阪市 カリン糖 祭囃子の音がする

富田林市 正直に物を見ている鈍感さ

倉吉市 告白が出来ず火種を抱いている

東予市 文部省へんところできりきみ出し

松江市 肩を組むポーズにめらう妻の顔

今治市 この顔に似合う面売り鬼の面

備前市 疑ったり疑われたりして生きる

今治市 石蹴って悔い積み重ね積み重ね

倉敷市 善と悪とばけて人形になりますます

高橋 古啓

野坂つき子

馬場 魚山

桑原 道夫

出口セツ子

津田 与史

西出 一栄

岩田 美代

奥谷 弘朗

小山 悠泉

梅本登美也

萬本 昌道

武内 雅堂

園部 正則

水粉 千翁

和津山市 囑託となり場外の人となる

今治市 琴ひびく琴の師匠の前行けば

東大阪市 その刺を敬遠されて嫁き遅れ

今治市 手をつなぐ園児に企みなどはない

東大阪市 釣れてない尾籠を子供に覗かれる

大阪市 プレゼントの傘へ嬉しい雨が跳ね

和歌山市 客へ出す寿司とも言えぬ値の動き

宝塚市 借りてきたダイヤが照れているデート

岸和田市 持ち味を生かす矢先に幕が下り

大田市 浴衣着て金魚すくいに来た親子

唐津市 雪景色 人の喜慶に関らず

今治市 星くずの中で拾った恋であり

平田市 美しい指が余韻を止めた琴

宝塚市 古くとも天神地祇に悖らねば

大阪市 昼寝とは違う暑さのひじ枕

西山 幸

月原 宵明

竹中 綾女

真山 国彦

竹中 肖二

松原 寿子

吉田 笑女

池田 露子

藤田軒太楼

田中 紫浪

原田 一風

久家代仕男

小畠 無聖

新川 貞祐

伏見 茂美

落魄の彩は見せない長屋門

倉敷市 手土産ができて外宮はやめにする

羽曳野市 振り上げた鎌 蟬螂のいじらしさ

羽咋市 白い雪きよいとばかり言つとれず

唐津市 氷山の一角ほどの見合いをし

今治市 会うたびに涙で送る母の老い

出雲市 朝刊の許せぬ愛をふれ歩く

岡山市 数蛇になって炬燵へ逃げて行き

今治市 死因には触れてはならぬ死を葬す

羽曳野市 商売に牛の涎を忘れかけ

大阪市 ヤクルトの殻工作をかって出る

唐津市 高官は弗を喰い国民は煮湯飲む

唐津市 へぼ将棋 公園の木蔭占領し

東大阪市 性悲し怒りが胸で淬になる

大阪市 若人の寄れば血を呼ぶ平和な世

堺市 悔い一つ残さず六十路突き進む

藤原 健二

岩橋 双虎

三宅 ろ亭

新岡回天子

古野 伶人

高見 鐘堂

川端 柳子

今井 松花

麻野 幽玄

神田 秀峰

田口 虹汀

山下 勝一

加藤千代子

黒田 真砂

栗本 藤持

岡崎 祥月



元公務員 福田 丁路

雑草と闘う汗を手で拭い
口笛が喘ぎに変わる野良仕事
精魂をこめた胡瓜が臍を曲げ
太陽の恵みに踊る葱坊主
土の香が野良着に浸る五月晴

昨年三月末、長い勤めから開放されて、主として趣味の園芸と、田圃仕事に取組んでいる。在職中も手掛けていたが、片手間では、どうしても中途半端になり、退職後を期待していただけに、退職早々田圃への勇躍出勤となった。年寄の冷水などと冷かされたり、健康を氣遣われたりの熱中振りであるが、相手も生きものの事とて、易々と意の如くにならず、悪戦苦闘中と言うべきであろう。中でも雑草の旺盛な生命力には、手こずっているがその中から、かれんな一輪の花を見つけ、見とれる事も屢々ある。

こうした忙しい隙間を見て、西国観音霊場を巡拝し、衆生済度の氣高くうるわしい仏の姿に接し、心の安らぎを覚えてゐる。

商業兼農業 嘉数 千代香

その客へ合わすわたしの風車
掌を合わす客にも生きねばならぬ嘘
小商人の怒り笑顔の中に埋め
泥まみれの汗が真珠となって落ち
ソロバンははじかず過疎の土まもる

邑久千町平野を眼前に眺める、片田舎の小店と小百姓、これが私達老夫婦の生活の城です。

台風十七号で床上浸水ノ稲は五日間も沈没して全滅状態の中で力一杯生きようとすると生命力を削られて、挫けそうになる心を助けましてくれました。又スーパー乱立で過疎の店は間に合わせ店とあきらめていましたのに此所では食料品、電池、ローソクと飛ぶ程売れ「此所にあつて助かった」と喜んで帰って下さる後姿をみて、俄かに生き甲斐を感じました。雨に叩かれた作物も首を長くして私の行くのを待っていてくれます。健康で働ける喜び、早く来てあげるよと作物に話しかけて災害の後片付けに余念のない今日此の頃です。



会社役員 山根 白 星

失われた伝説の復権を求めて上京した昭和二十三年。パンをあがなうために、ネクタイと言う細紐で体制に、縊られるのである。

会社での私は隠れキリシタン

嗅ぎつけられた、隠れキリシタンには、踏絵などの必要は更がない。忽ち、

君もまた良貨のひとりたる左遷

慰めて呉れる多くの親友達が居たものの、さい果ての左遷ききしにまさる雪

西国生れのやつがれば、蝦夷地の冷酷な風土に、当座は辟易したものであった。これより北海道から九州に至る朝秦暮楚の生活が始まるのである。そして三十年ごろ漸く、当地に安住することを得たのであった。

儀杖兵めいて勤続賞貰う

賞。と名の付くものは、これ以外に頂戴した記憶は全くない。

辛うじて住む東京をうらやまれ

かくして、嘆息するばかりなのである。

主婦 高橋 夕 花

母に似た古い女の鍵をもち耐え忍ぶことのみ多き女川旅がえり大きく廻る洗濯機夫と子の話題の外でレース編む倅せを流すに惜しいしい風呂

働くと申しまして、平凡な主婦でございまして、結婚当初より、家庭を守ることが第一という亡母の教えをすこしばかり身につけて、ひたすら、夫と息子に奉仕している毎日でございます。女の子がいないので、雑事一切まで引き受け、よくまあ、こんなに飼育されたものだ、自分で感心しております。

しかし、そんな私に、誕生日は夫から、母の日は息子からプレゼントを受けるとき、心から倅せの中に浸ってしまいます。

そのかたわら、花を受し、ロマンをえがきそして、ささやかな倅せを、大きく喜びながら、今日も明るく、リズムカルに体を動かしております。



職人 三宅 不朽

掌の血豆ですんだ今日の無事

日当をほめられ税務署から帰り

臍首なき掌なれど十指を風が抜け

汗キリ男の素顔極まれり

甦える初心冬の鉋研ぐ

当時の食糧事情から寒風の中を、カジカム掌にニギリ飯を噛みながら師匠の家に通い、ほの暗い朝を起き先輩の仕事にヌスミ始めて三十年が過ぎ去ってしまった。

巷の職人氣質を支えているのは、良くも悪くも見栄と自惚である。ヘソも曲げるがお前でなければと言われでもするなら玉の汗を流し平気で妻の財布を干して仕舞うのである。幸い倒産だ昇級だ臍首だの心配はないのでペコペコせずに腕一本でどうにか食える。

僅ではあるが理解ある人がまだ残って居り稀にはあっても、手がふるえ眼の底まで洗われる思いの桎梏を掌にする事があるので、妻には不運と諦めさせる事にしていく。

元建築業 若宮 武雄

もう春が もう秋来たかと言う稼ぎ

口下手の悔いなき日々の汗みづく

ひとの倍 勉めて並の暮し追い

何もかも満たないままの達者とも

来し方を見れば今日がある不思議

戦時中軍需工場営繕課を担当の七年間は、工場増設、保修の重い責務を負い、不眠不休常識を無視した工程、日程を遂行してきた。終戦でこの体験を活かす自営へ戻った途端

の約三年間の病臥で、どん底暮しへ………そこへ六人の子が上級校へ進学してゆく、

まだ癒えぬ体を押して昼間は現場、夜は次の工事の設計や見積、よくぞあの無理を押し通し切れたと我乍ら、しみじみ不思議に思う。

思えば職人も下請もお得意も、よい人達ばかりで、又災厄にも遇わず、総てに恵まれて私なりの、倅せな悔いのない歳月だった。

離職した今は、使いすぎた心身を整えて、命ある一句、掴めたら言う事なしだが………



古物商 吉岡通児

食べものと生きものはなし吾が小商
ひやかしと知れる客にもご愛想
お昼食まだ三分の一へ客が来る
夜買うた軸 昼の目で偽と知る
だまされる事も生活の授業料

私が少年だった頃、日本は国を挙げての戦争だった。こう書けばいまや乗りに乗っている異色落語家の弁となるが、当時から去る四十八年まで電々公社の一介の月給とりを続けていた、故あって脱サラを敢行現在に至る。店名を彩生堂と号し冠文を掘出品センターと称す、扱う品目においては、食料品と動植物を除き一切という賑々しさ、主として中古品が主たる商いの材料である。したがって古いところでは書画骨とうの類、新しいところではテレビ、ラジオ、時計、宝飾品、等々品目にすれば数百種に及ぶ訳で、棚おろしの日は一年を通して一番疲れる日となる。

農業技術員 遠山可住

観光のルートをそれた鋤を打つ
まだ霜が来ると百姓あわてない
おや生きているやないかと水をやり
鋤握る汗がそのまま農夫の詩
表彰の三行ほどを切り抜かせ

この道二十五年余。冷害が来ると娘を売ったという農村も随分と変った。田のあぜに腰をおろして稻を話し、一パイよばれながら一晩語り明かした若き情熱は、いま白髪を染めて老眼鏡越しに計算機をにらんでいる。若者は赤とんぼと一しよに村から姿を消してカブト虫を捕りに帰って来る位の村祭りとなった。立身出世というサラリマンの常識とはおよそかけはなれた悟りの道を黙々と歩きながら、自然に挑戦しては敗れ、挑戦しては敗れ、偉大な自然の摂理を心の中に積み重ねて行く。「何ぞ儲かる作物はおへんか」と電話がかかる。それに答えられない悲哀の中で精一パイ明日を考える——そんな毎日である。



水車さん逝く

菊 沢 小松園

また一つ古い、川柳雑誌不朽倶会員の残灯の一人が消え去って逝った。川柳塔同人吉田水車さん(七十四歳)温厚な人柄と寡黙な日常、句は人なりの言葉通りに、句もまた世に合うことなく、此の時代の多くの大抵の人達がそうであったように、自己顕示の華やかさは微塵も持ち合わせなかった。

筆は割にまめな方で川柳塔にもよく投稿して居た。出生地は静岡県の沼津と聞いて居る戦後現在の名古屋へ移られたが以前大阪に在住中はよく「川柳雑誌」の本社句会等でお目に掛った。

奉天にも居られたこともあるので大陸川柳同窓会へも出られると昨年宮島厳島神社で大会があった。出席せられる予告があったらと大井正夫氏から聞いて居たので、戦後一度も御目に掛らず、文通はあっても声咳に接せず楽しみに私も西尾榮氏と一緒に出席し、出席簿の記名を見て賑やかな多勢の待機中の

出席者の中を一巡して見たが、初めはなかなかそれと見分けが附かない程、それは三十余年の歳月の流れはその顔にも動作にも相当の変化があった筈だからである。でもその内水車さんも探して居たらしく時を弾ませて小松園さんと手を握ってくした時には何かしら一瞬込み上げるものを感じた。

色々なことを経て来て人は生きて来たと言う感慨に泌々と味わる。その瞬間ほど強いのは無いのだろう。声のない感情はその御互いの血の中で雄弁に物語りを初めていた。川柳を続けていたよかつたとおもう心に詐りはなく、お互長い長い蓄積を一気に吐く思いで言葉が続いた。無論大方は川柳を通じての話であった。

戦前の川柳雑誌の本社句会場の日本橋倶楽部時代、御津八幡宮時代の話も出た、戦争に連がる奉天時代のことには何故か触れなかったこと一寸気になったが……御互いに健康を祝し合いました来年の再会を約して翌日午後名残りに別れたのが一期一会を地で行く結果に終わった。惜しい人のひとりで淋しいことである。九月号の水車さんの割箸で指すもあわやと塩の浦の句を私が秀句鑑賞に知らずに取上げていたものも不思議な因縁的なものを感じるのである今年九月二十四、五日に涉る高知市に於ける大陸川柳同窓会で挨拶の中で水車さんの悲報に触れて於いた。今はただ静かにその御冥福を祈るのみである。合掌

悼吟

水濁れて水車の音も消えたまま 小松園

吉田水車の句

宮殿下運配のことに触れ給い

停電の中ですかすかな箸の音

君少し慌て給えと十二月

徹いま蟻の努力を絶たんとす
お勝手は何んでもよいに困り果て
自らを叩く鳴くか虫の声

二人だけの38年間

吉田 文子

転法院涼興水車居士

不出來な私を三十八年間おんぶして、さぞ人生重かった事と今更ながら背の広さをさとされました。本当に二人だけの人生でした。どうぞ御察し下さいませ。二月に一度真夜中廊下で倒れ、三週間程の通院で一度は元気にしていただきましたのに。

八月二十二日の日曜日、気温は今年最高三十五度になりました。ちよつと気分を悪くしてはいたのですが、何時も丈夫な人です。食事の用意して出かけたのですが、帰りましたら倒れ、洗面器に汚物も出して居たので、近くに居る義姉に来てもらおうと申しました。気の毒だからといって申し、何時もかかりつけの先生に電話をお願いした所、暑気アタリでしようから、上下冷して居なさい、朝一番で行きますからとの返事故、朝先生が来て下さるのをどれ程待ちましたか、お察し下さいませ。救急車と言う事をどうして気付かなかったか、先生ばかり頼りに誠に本当に残念で、不出来な私、どうぞ御許し下さい。

昔主人の方の親の反対を押し切り、今日までいたわり合いますがまいりました。私には本当に出来過ぎたもったいない方でした。思いやりの深い方でした。

(明治35年9月15日生。脳溢血・自宅で8月25日午後1時45分死)

静観堂氏逝く



有 信 新之助

敗戦の責めこのへんでご勘弁

静観堂

伊丹市春日丘総面積千五百五十坪、広い芝生の美しい、邸宅の名にふさわしい小川邸を初めてお訪ねしたのは五年前になる。

対面してまず印象づけられたことは、丸い童顔の横に付いている、見るからに柔らかな大きな福耳であった。そのせいか、この人が幾つかの陸軍病院長を歴任してきた、元陸軍軍医大佐なのかと、訝るほど柔和で、腰の低い、お人柄に見受けられたが、まだ小さい二人のお孫さんに、「敬礼」と号令をかけて、私に挙手の礼をさせられたので、やはり軍人さんだなと、ほほえましい雰囲気であった。

週に二日、伊丹の自衛隊に診察に行かれる。彼は、外出されることが無い、とのことなので、それ以来折にふれて、静観堂さんの希望される処へ、車で御案内するようになったが、その先々や道中で、押寄せてくる都市化の波

で、日に日に変貌してゆく街の姿に、「昔は此処はこうなっていた」「ああ、あの建物が無くなっている」と、深い興味を示して喜ばれるのが、私もお供をする甲斐があった。お会いする度に、戦地でのお話をよく伺ったが、「私は医学校を出たので軍医になったが、本当は実戦部隊が好きだった。それで自分から志願して、よく戦地へ出た」と云われたが、福々しい容貌と低い物腰からは、そんな激しさが感じられなかったが、八十才を超えた枯れきった人柄のせいであつたのかも知れなかった。

そんな中で同じ軍医であつた福井野迷路氏にお会いしたい、という御希望もあつて、一度大萬川柳大会に御案内したが、野迷路氏が無口な方であつたのと、静観堂さんからは、閣下といわれる上官に当るので、遠慮も手伝つたのが残念なことであつた。

私に副官という渾名が付くほど、よく静観堂さんのお供をしていたが、その内にどうも御家族の方が、出先で何か事故があつてはと帰ってくるまで御心配の御様子がつてきたので、それ以来お誘ひがあつて、車でお迎えに行くことを止めてしまった。

昭和四十七年九月一日付の書信で、冒頭の句を辞世の句とするから、心に留めて置いてくれと、お預りするところになったが、昭和五十一年九月十九日午後七時四十分永眠の訃報に接して、とうとうこの句を御披露しなければならぬことになつてしまった。

九月二十一日の葬儀は、起居をしておられた部屋に遺体が安置され、広い芝生に張られた大きなテントの中や、後方に会葬者が詰めかけて、弔電だけでも百七十余通という盛大

な葬儀で、焼香者の中に自衛隊幹部の姿が見られたのも、元軍医大佐の葬儀にふさわしい光景であつた。

空浄親院博山寿昌居士 享年八十九歳

追悼吟 軍刀がいのちを救う匙になり

新之助

戦後柳人と会う第一号

不二田 一三夫

いっそちぎらうかシャツのぶらぶら紐

静観堂

この佳句は戦前の作品で、小川静観堂先生のおそらく代表作であろう。路郎・葭乃先生激賞の作だ。先生から「一度川柳社を訪ねたいが周囲の者たちが許してくれない」と何度かお便りをいただいたので、47年4月16日、お庭の桜を拝見しがてらに、新之助さんに頼み、車で葉子さんと三人で訪問した。

「戦後はじめて会った川柳家第1号はあなたです」と非常にうれこんでくださった。

奥様との出会いなど、愛妻ふりを披露されたものである。軍服姿での結婚記念写真も新之助さんが撮つてもらった。ここへ出したいがスペースがないのが残念である。

その後も先生から夕食に招かれたりお世話にずい分なつたものだ。先生は八月ごろからときどき病床にあり、ひよつとしたらそんな不安な気持だつた。九月号には（路郎物語）路郎先生とお写真が出来ますよ。（九月号だけはお見せしたかったのだ）とお元気づけたものである。「川柳寄席」も読んでくださった。先生、野迷路元將軍ともうお会いになりましたか。合掌。

大都市

桑原喜風選

ふる里の良き大都市へ来てわかり
 大都市のネオンに陰で拭く涙
 大都市を器用に泳ぐモンタージュ
 大都市のネオンに足をふみはずし
 一発が出ず大都市の隅で古い
 住民も知らぬ大都市夜の顔
 大都市の垢を落しに帰省する
 大都市に集り散ず根無し草
 大都市へ華やぐ蕾憧れて
 大都市の夜を彩る火の女
 大都市の中で小さく埋もれ咲き
 大都市の裏だけ知ってUターン
 大都市の餌にされてるお人好し
 大都市に土を知らない子を育て
 大都市へまだビル結める杭を打ち
 地上地下網の目にて巨大都市
 大都市へ描いた夢と別に生き
 一隅を照らし大都市にひとと住み
 大都市の昼と夜とに馴染む嘘
 大阪の呼吸むんむん梅田地下
 大都市に膨れあがつて公害禍
 裏の裏ドラマが尽きぬ大都会
 大都市に住んで雀も汚れてる

方大 軒太 登美也 道子 一風 松花 一彦 国彦 夢醉 七面山 秀峰 春雄 白水 思月 右近 双虎 太茂津 恒治 ますえ 弘生

狂騒のドラマ大都市朝が明け
 夜の大都市親の知らない花も散る
 大都市を満たす市場は活気つき
 大都市の死角で生きる遅ましさ
 大都市の時が止まる日の恐怖
 大都市を逃がれ左遷の嬉しがり
 大都市に昔牛馬もいた絵巻
 大都市の空地眩しいサラリーマン
 大都市へ若い野心が渦をまき
 大都市の中で女が武装する
 大都市でやつと苦学の花が咲き
 大都市の隅で善人生きのびる
 大都市の繁華でうまく泳ぐ掏摸
 大都市も生きづいてくる朝が明け
 根性で生きてまっせと大都会
 大都市に母さん星が見つからず
 大都市は昼と夜との顔を持ち
 浪花奴もうかりまっかで街栄え

佳 大都市が自慢日銭のコップ酒
 誘惑に負けず都の隅で貯め
 大都市に覗かれたくはない暮らし
 大都市の昼をうどんで食いつなぎ
 大都市のどこか割込む抱持つ
 人 大都会出世する土堕ちる土
 地 大都市の嫌いな祖父は縄をない
 天 大都市の隅で拾った人の愛

洛度 洛度 重保 芳仙 豊彦 天風 雅彦 敏子 保子 肖二 紫浪 雀声 秋女 和堂 通風 昌道 洋々 曉明 正則 木魚 富子 弘朗 伊津志

米

横山一声選

米一升値段も知らず食べている
 標準米有ります札は隅に貼り
 餅好きの子の命日へ米をとぎ
 新米も古々米もない食い盛り
 米代が機械に代る米作り
 生産と消費米価の板ばさみ
 新米を自慢の父はまだ老いず
 子沢山米の量からまず話し
 衣食住足り玄米の膳につく
 雀の目粒のこぼれを見逃さず
 米粒が真珠に見えて二人きり
 開拓地瑞穂の米を締め出され
 学者の眼土器の靨跡見逃さず
 米粒を拾う明治に訓えられ
 米作り生き甲斐にして夫婦老い
 米の値もようやく知った新世帯

実人 伶子 恒治 不二 豊生 優子 カズエ 岩光 曉明 双虎 勝一 弘生 太茂津 豊生 木魚

愛媛川柳の流れ 第二巻 長野文庫著
 長野文庫氏ならではの好著。愛媛川柳
 がひと目でわかり、同時に日本の川柳界
 の動きがひしひと迫まってくる。ゼヒ
 ご一読をおすすめる。(頒価送料共千円)

快方へ嚙み緊めて食う米の飯
出稼ぎをせねば食えない米作り
母の日も母のリズムで米が炊け
俵せな米 種として残り
今日からは新米水の加減かえ
暑い日に耐えてお米はうまくなり
黒い霧よそこに黙々米作る
受験の日神饌米も入れて炊き
赤飯がうまい自分の歯で米寿
童顔に米粒ついて若返り
米値上げメニューをまた書き直し
休耕地草を育てて米を買い
米菓子が淡くすかに舌に熔け
世界一高い主食を食う雀
神主として一粒の米拾う
新米の匂い仏前から流れ

米粒をひろい老婆のひとりごと
お粥からご飯へ嬉しい米をとぐ
流し台不運な米がこぼれてる
弁当の蓋から食べる米の味
米作り瑞穂の国に居て迷い

酒米と呼ばれる米にある誇り
米俵かつえた腕に孫を抱き
老農の日誌は米とともに生き

天地の恵みと汗で米がとれ

登美也 満津子 重人 伊津志 弘朗
七面山 右近 可住

国彦 思月 茶人 大方 一郎 敏 本蔭豪 満津子 秀村 妍斉 藤持 藤持 七面山 香珠夫 白水 里風

秋晴れ

西森花村選

秋晴れに保母の視界をはみ出る児
秋晴れにリュックが降りてバスは空
秋晴れの砂浜ボート裏返す
秋晴れに生駒の鉄塔数えられ
秋晴れの被災地へ来るインタビュー
秋晴れの空を病む子へ手鏡で
秋晴れをみさせてやりたい車いす
秋晴れに盛り沢山なスケジュール
秋晴れへひとつ転んだ握りめし
秋晴れに案山子も笑みそう稲の波
老眼鏡ははずせば秋の空が澄み
宣誓の手が秋晴れの空を突き
秋晴れに真っ白洗濯物が舞い
秋晴れへガイドブックの手でおしえ
秋晴れに柿くつきりと柿の色
秋晴れに鉄砲水がうそのよう
秋晴れへ寮母が一人留守の番
秋晴れへ生きていました曼珠沙華
秋晴れへ一駅歩くよい景色
秋晴れへ野仏はただ無表情
秋晴れの畦はお八つが待っている
秋晴れもみな俺のものの過疎に住み

照一 勝光 綾女 昌道 俊風 翁童 富子 里風 雅風 可住 悠泉 天彦 カズエ 重人 弘朗 本蔭樺 暁明 無聖 与史 藤持 太茂津

秋晴れへ腹が減ったなと思ひ
秋晴れへ溜った仕事のあれやこれ
富士の山宙釣りにして晴れる秋
秋晴れにチャイム虚しい御用聞き
秋晴れにうれしいプランの赤電話
秋晴れて石鎚一日雲を見ず
秋晴れて埃かふりし道しるべ
深谷の上細長く秋晴れる
秋晴れて朝顔小さく咲きそろう

双虎 どんたく 右近 優 春雄 バット 一郎 松花 回天子

秋晴れへ失恋なんかぶつとばせ
秋晴れの最後の村やダム工事
ふと干して秋の一日の豊かなる
秋晴れの大山麓は冬支度
秋晴れに蒲団乾してる子の帰省

方大 岩光 秋女 登美也 正則 無人 保夫 太茂津

秋晴れにガイド遠くの山もほめ
秋晴れを見上げるだけのとに住み
秋晴れの拘置所塀が高過ぎる

地 天 人 軸 軸

愛媛川柳の流れ 第二巻 長野文庫著
以前出版されたものの続篇。昭和二年
から終戦までの愛媛県川柳史である。著
者は愛媛県川柳連盟役員、汐風川柳社同
人。
発行所 千794 今治市共栄町二の二の
三三。文学社。

伴せは薬を知らぬ六十年

家伝という薬がこんな露地に住み

この上は漢方薬という手段

薬価無料と知って老人つめかける

服薬を忘れぬように部屋に白湯

(服薬忘れなど部屋の白湯が言う)

医者にまで講釈している薬好き

効き過ぎた薬へ妻のくどい愚痴

だんだんと薬が苦く回復期

薬見て痛みが止るアレルギー

ほとぼしる汗は薬を寄せつけず

高貴薬患者の心理うまくつき

胸の傷どんな薬もいやせない

(百薬の長も効かない胸の傷)

同 保夫

同 正則

同 同

同 同

同 伊津志

同 藤持

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

傷心へ薬となった母の愛

医者嫌い薬嫌いでご長命

自己催眠かけてのんでる保健薬

信頼が薬の効き目倍にする

妙薬がまた見つからず恋を病み

窓口の薬袋が手に重い

良薬が口に甘くてのみ過ぎ

一服の下剤で生氣取り戻し

置薬少しはへって恙なし

投薬を待つ間同病語り合い

副作用が無いと薬草見直され

薬医門くぐる尼僧の美しく

ハンサムな薬師如來の人間味

特効薬が無いのが悩む恋病

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

またふえた薬持参の老父が来る

着いてすぐ薬のむろ所望され

湯上りへ電話のあとの風邪薬

(長電話の湯さめへ風の薬のむ)

薬局とアレ下さいで解る仲

新薬が舌咬みそうな名で忘れ

晩酌が薬の老父です医者知らず

薬にも毒にもならぬ課長補助

気休めは百も承知の常備薬

紅 扇

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

雅号ぶっちゃけばなし (153)

はくせい



山 根 白 星

やまね

不世出の名横綱、双葉山が、空前

絶後の六十九連勝に、終止符を打っ

た時の、私の突然自失ぶりは、恰も、神洲不滅を信じ

て疑わなかった日本の敗戦の時に匹敵するものであつ

た。遠々と続いた彼の白星が、まだ脳裡に、新鮮に灼

き付いている頃、川柳に手を染めたのであるが、その

折、単純に、本名の「博正」を、もじって雅号にした

までのこと。

その後、稚拙な雅号に、嫌気のさしたことも、ま

あつたが、何となく捨て難く、今日に至ったものである

。それから、生意気につけた、別号の「枕流子」

は、漱石の向うを張ったつもの、他愛ないものであ

(会社役員・五十歳)

PRの欄

「川柳に笑いとユーモアをたっぷり」との運動展開中です。

銭数える時だけ無我の境になる

姑のままとめていて盆三日

人間の都合でダルマ片目なり

兄嫁と膝つき合わす母の死後

親の目に頼りないのが父になり

(伊丹市・ゆうもあ川柳会)

題一余十一月二十日締切(一月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

〒七一―

本 田 恵二朗

大 萬 川 柳

「連 想」

入選発表

選 者 川 村 好 郎
投 句 総 数 四 百 八 十 句
入 選 五 十 六 句

連想の中に自分を見失い

大 阪 柳 宏 子

連想の果てにぶつかる厚い壁

連想の果ては現実のしかり

鳥 取 静 泉

連想へ埴輪が生きて動きだす

連想はもうロンドンに着いており

交 野 茂 児

連想が過ぎた誇大妄想狂

連想がクローズアップするデート

和 歌 山 久 子

連想のゆきつく先は金のこと

連想のまだブランコが揺れやまず

堺 一 二 三

連想はやめようみじめになるばかり

原爆につながってゆく入道雲

八 尾 夕 花

連想の微笑を妻に咎められ

戦災をまざまさ思うふかし芋

和 歌 山 武 雄

連想の飛躍いつきにペンをとり

連想の余韻残してフイナール

堺 天 笑

ふかし芋モンペの亡母が目に見え

連想を捨てればもとの孤独感

大 阪 満 津 子

連想の度肝を抜いた推理劇

和 歌 山 福 水

拡がってゆく連想を蚊に断たれ

鳥 取 洋 々

満月へ父はうさを踊らせる

日の丸の旗から覗く戦友の顔

八 尾 鬼 遊

映像は遠のき連想劇終る

ひとり酌ぎして連想の限りなし

今 治 宵 明

連想の中にひそんでいる焦り

連想のたのしきを持つ裸婦の額

大 阪 智 子

連想を中途で区切る流れ星

連想の自由楽しい孤独です

和 歌 山 太 茂 津

連想に終り独りのわび住居

連想に終り金策ままならず

奈 良 保 夫

幸運が続く連想におぼれかけ

ポケットを探れば連想湧いてくる

岡 山 翁 童

ミレーの絵連想させる野良夫婦

民宿の湿みへ浮ぶ母の顔

東 予 悠 泉

営業店

阿 倍 野 店

堺 吉 店

住 野 店

平 島 店

都 福 店

今 三 店

九 条 店

八 尾 店

良い買い

月賦百貨店

credit system



丸 越

本社 大阪市阿倍野筋3-15-1
TEL 632-3806・3807

想い出をたどって秋の心足る
会えぬ日の連想せつなくなつてくる

大 阪 燺 斎

あれこれと連想焦点見失い

連想のあげくの果ての高笑い

悪い方ばかり連想する不幸

藤 井 寺 殿 江

強烈な連想となる曼珠沙華

連想へ過去のくらしがひっきり

連想へ女身近かになって牙え

兵 庫 可 住

連想はもうハネムーン突っ走り

儲かった連想芦屋に家が建ち
連想はいつか悶えになっており

西宮 多久志

少年の連想大空かけめぐる

連想が醒めたところに妻が居る

ふるさとの駅で連想あたためる

それぞれの連想許して月光る

佳句 八尾 美幸

連想をひろげヒステリきつうなり

天笑

連想を故郷へつなぐ赤とんぼ

小 路

都合のいいように連想して眠る

雅号ぶっちゃけばなし (154)

いっぽう



原 田 一 風

はらだ

中学二年で俳句をはじめた時の雅号が「荷石」詩や童謡は「雨晴」。川柳をはじめた時誰かが親切にも雅号をつけるものと教えて呉れたので早速「一風」とつけました。後で父が趣味の浄瑠璃を語る時の名が一〇(いちわ)と云う事を知って嬉しく思いました。ところが投句をはじめてみると、句数制限が有る為沢山投句すればそれに応じて雅号が必要となり、多い時には数十の雅号を製造して使った事もあります。空襲で昔の句帳も焼けてしまい、どんな句を作ったのか雅号で発表したか判らなくなりました。今使っているのは本名輝親の外伶人、松花、国彦、一郎、バット等です。

(教員退職後珠算整経営・十月から六十六歳)

倉敷 素身部

選者吟

言葉尻からも連想する妬心

尼崎 利美

山鳩が鳴いて悲恋を想い出す

大阪 熾斎

人ノ句

連想の雲母となり友となり

八尾 美幸

地ノ句

連想はモナリザ胎児動いてる

倉敷 簡子

天ノ句

ちぎれ雲いつか来る日の核家族

八尾 夕花

昭和五十一年度

ベストテン (九月現在)

一	美幸	二五〇	八尾
二	鬼遊	一七〇	八尾
三	花梢	一六〇	富田林
四	百酒	一五五	西宮
五	牧人	一五〇	神戸
六	一二三	一四五	堺
七	洋々	一四〇	鳥取
八	好々	一四〇	大阪
九	夕花	一三、五	八尾

川 柳 塔 柳 箋

一冊 100円 送料 200円

一〇	天笑	二、〇	堺
一一	多久志	一、五	西宮
一二	静馬	一、五	宝塚
一三	智子	一、五	大阪
一四	幸子	一、〇	和歌山
一五	小路	一、〇	寝屋川
一六	あいき	一、〇	大阪
一七	筒子	二、〇	倉敷
一八	吸江	二、〇	藤井寺
一九	静泉	一、〇	鳥取
二〇	君子	一、〇	大洲
二一	富翁	一、〇	和歌山
二二	翁童	一、〇	岡山
二三	としよ	一、〇	和歌山
二四	道夫	一、〇	和歌山
二五	憲祐	一、〇	堺

昭和五十一年度最終回

「とどめ」 五句以内

締切 十一月二十五日

昭和五十一年度第一回

「つづく」 五句以内

締切 十二月二十五日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一―三―七

藤井二三万 大萬川柳係

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

▼弓削川柳社主催の西日本
川柳大会(9月12日)へ出
席された生々庵主幹はあの
台風に遭われ丸一日おくれ
て帰阪された。

▼麻生葎乃先生の新住居は
〒630-002奈良県生駒
市山崎新町8の11(電07
437④3937)

▼高橋操子句碑建立記念川
柳大会が十一月二十三(日)
祝日)午前10時から、久米
田寺境内で開催(P64参
照)

▼川柳「柳友」の第3回年
間特選句が10月号に発表
第一席「すきのない人が一
日着くずれず(木村けい子
)第二席「子」を叱るとき
自分を何処に置く(吉岡三
三)第三席「背の丸い母が
一番気が強い(伊藤紺矢)
▼ふあうすと広島川柳大会
が11月14日午前10時から
広島市大手町一丁目のホテ
ルあいおい二階大広間で開

兼題「集る・土産・渡る・
鯉・鹿・鳥居・鳥・各題三
句。席題なし。会費七百元
(発表誌希望者は千円)呈
賞多数(投句拝辞・昼食な
し)連絡先広島市上轡町11
-3三輪聖孟方。

▼川柳岡山社では第27集「
吉備団子」の句稿募集集中。
参加者自由、自選10句、住
所氏名・雅号・年令・職業
電話番号を規定の用紙に記
入。参加費千円、12月10日
締切。〒700岡山市津島
東四丁目一八H3114001
川柳岡山社宛。

▼川柳あしなみ20周年記念
川柳大会(10月24日)の兼
題選者に阿万氏の氏、席題
選者に吉原紅月氏出席。

▼川柳みどり会では一五〇
号を記念して誌上川柳大会
の作品募集。詳細は〒47
0-21愛知県知多郡東浦
町森岡字下今池五の六九渡
辺和尾方。

▼豊岡川柳天守閣・瀬戸川
柳おとひめ共催句会は豊岡
市瀬戸「瀬戸公民館」11月
14日開催。会費五百円。題
目「朝・馴染み・今頃・マス
コト・馴染み・今頃・マス
時事雑詠。詳細は〒570
守口市豊秀町一の一〇九川
柳天守閣、久保田以兆宛。

▼風「10号(季刊・河野春
三編集)」が発行。目次には
「亜」の随想と後記(2)
安西冬衛。△詩△俳句△
△川柳△が詩誌の感覚でレ
イアウトされている。定価
五百円(送料共)大阪府高
槻市竹の内町二の二の河野
春三方。

▼榎田竹林句碑建立基金募
集一敷地は静岡市登呂公園
東側。碑句は「月」としての窓
のひととき真人間「竹林」
「おもいで」のどこにもそぼ
にうちの人「柳葉金」除幕
は51年12月12日。募金は一
口千円(何口でも可)募金一
締切は12月20日。送り先〒
420静岡市金座町二十一
の一、株式会社中部相互銀
行内。静岡川柳社特別会計
・菱崎杜子春・一口座番号
一八四四二。

▼類題別柳宴句集「菊花石
」出版記念川柳大会が明年
1月16日午前10時から、岐
阜市神田町四丁目目の丸
会館で開催。投句は受け付
ない。会費八百円、懇親宴
二五〇〇円、宿泊朝食付三
〇〇〇円。12月20日締切。
詳細は〒502岐阜市大福
町五の十三、県住424の
太田翠山方となっている。

▼川柳新聞第1号が10月5
日付で発行。川柳を正統
に評価すべきである。これ
が創刊を決定した理由であ
る。と。一部一五〇円・月
一回発行〒1191東京都日
野市多摩平163の1川柳
新聞社。

▼第18回西日本川柳大会が
10月31日に国立公園雲仙「
妙見山荘」で開催。柳話の
堀口塊人氏ほかが選者とし
て福永清造氏らが増不二也氏
加賀破竹氏らが関西側から
選者として出席される。

▼国鉄川柳の事務局が九月
からかわった。会長は古川
一萬氏、総務が宮口笛生氏
(奈良市同人)会計監査に都
食求芽氏(京都市同人)ほ
か。なお同誌の雑誌「山脈
集」。選者は宮口笛生氏。
▼小野十三郎氏(詩人)と
高鷲亜鈍氏は友人の間柄だ
が、10月17日開催の三井が
丘川柳教室で友情柳話をさ
れた。

▼備北新聞10月5日号に大
坂形水選「発表」が掲載。
軸うたったのか「形水」
そうだったのか「形水」
▼岐阜川柳社事務室が左記
へ移転。〒502岐阜市大
福町五の十三、県住四二四
太田翠山方。
▼竹田花川洞氏が8月27日

急逝。享年七十五歳。東京
柳壇の雄。
▼同人の動向△
▼若本多久志氏(西宮市)
は自動車販売ニュース(9
月25日版)「時事川柳のた
わごと」を執筆。「終点は
拘留所でした立志伝」柳志
「眉目秀麗の悪党もあり
はありー三夫」獄窓へ
父ちゃんガン張れ黙秘権
多志志」ほか。軽妙なタッ
チで汚職を衝く。

▼小西無鬼氏(兵庫県)か
ら少し時間が出来たら句
も発表し、若い人の育成に
努力したいと念願していま
す。

▼中川晃男氏(松江市)に
男子のお孫誕生。とうとう
おじいちゃんになってしま
いました。

▼弘津柳慶氏(柳井市)も
八月二十七日に初孫女児誕
生。オジイちゃんと呼ばれ
プゼンとしています。

▼尼緑之助氏(出雲市)は
病床の安達潮音氏(川柳塔
賞)に代わって二賞発表句
会に出席された。この親ご
ころが島根柳人の底力とな
っているようである。

▼河村日満氏(鳥取市)か
ら「何十年ぶりの水害と叔
父の葬式がカチ合ヒドイ

目にあいました。

▼岡村久志良氏（岡山県）

から八月中旬からは夏風邪で熱がひどく一と皮むけました。もう大丈夫なので川柳復帰も近です。

▼梅路庵不醉氏（姫路市）

から「台風17号で植林を少しやられました。ちよっと痛いですが人蕃の被害はなかったです。

▼浜田久米雄氏（岡山県）

台風十七号には稲は倒伏、床下浸水。避難命令に柳書を入れた包みが重く、生まれてはじめて水害に疲れましたと。

▼岩本雀踊子氏（和歌山城）

観月短歌、俳句、川柳大会の川柳の部で観光協会会長賞を獲得「ボンボリのゆらぐお城に四季がある」その他に選者賞として西山幸氏「名月が女に返えす盆月前」桑原道夫氏「鉄塔の尖にきびしい月がある」が入賞された。

▼浜野奇童氏（弓削川柳社）

から「国鉄全線マヒの本年の大会でしたが、生々庵先生や薫風、岳人両氏ののご出席や、静岡川柳の榎田柳葉女さんら十一名、東京の高木九史氏の遠来のお客さまを迎え内容のある会

をもつことが出来ましたと

▼橘高薫風・板尾岳人両氏

は10月3日の小松川柳大会に出席されたが、松会後スグ帰阪、本社の二賞発表句会にすべり込むという早わざであった。

▼不二田一三夫氏作「美少女の老いゆく姿おもうまい」

「眉目秀麗の悪党もありはあり」は五篇が、歌誌「ハーブ」に紹介された。

▼葛城伊三郎氏（岸和田市）

は10月3日急逝（享年69歳）。詳細は次号「振りかえりながら私のラバさん」で送る。小松園。

▼故吉田水車氏未亡人吉田文枝さんから

「10月10月号発表の「年のせいかこの頃掌を合せ」を涙してよみました」戒名は「転法院涼興水車居士」をいたした。

▼故山田季賛氏の追悼川柳句会が9月18日に広島川柳会（石原伯峯氏）主催で開

かれ、国鉄関係は多くの柳人から寄せ書きが拝受。▼小川静観堂氏の告別式が9月21日伊丹市の自宅でおこなわれた。自衛隊員などの参列で盛大。本社からは小松園・多久志氏（息（代理）新之助・岳人・葉子諸氏出席。

▽旅 信△

▼黒川紫香氏（尼崎市）

から「ハワイ便り」寒さ抜ける碧きワイキキみな裸「紫香」▼菊沢小松園氏（大阪市）

から高知大陸川柳同窓会便り。

▼福田丁路氏（高槻市）

から徳島便り「海軍に召集され駐在した阿波橋特攻隊基地を三十年振りに訪れました。夕陽射す兵舎の跡の彼岸花」丁路。

▼香川静々氏（八尾市）

から北九州便り「関門橋を眼下にする山荘で旧陸軍兵器学校の三十一年度の同期生会です。かつての紅顔のおもかげはなく、いいおやじさんばかりでしたと。

▼橘高薫風氏（豊中市）

から岡山便り「台風17号で弓削大会にはアブレる」岡山には立ち往生。本土から来て四国へ渡り大阪へ帰る姿男たち「岳人・牧人」

▼越智一水氏（今治市）

第18回柳川連全国大会の寄せ書をおかやま桃太郎荘から拝受。

▼十一月の句会▲

▼菜の花句会は十日（水）

夕六時から西郷会館（八尾神社境内）で開催。近鉄（大阪線）八尾下車南歩一分

一題「岳詰・楽・交替・風船」席題。二題（兼席共五句以内）

「投句は適当な句箋に各一句毎記入。裏面に雅号記名、郵券百円同封、締切当日到着分限。投句先。目五八 八尾 美幸宛 一丁目二五 大路

▼南大阪川柳会は二十日午後六時から「松崎町三丁目大萬で開催。題「特長・大筋・行掛り」する。

▼川柳東大阪は二十七日午

後六時から東大阪市中央公民館一階第一集會室。十一月に限り一階第一集會室に変更。一題「駅前・家族・支える・コース」席題二題当日発表。

▼平安川柳社の辰男・温子会が十一月三日の還暦祝賀句会「絢一朗氏72時から中京区室町通御池南西角の傑光ビル4Fで開催。一題「友だち・鈴・草原（予約制）」

忌水葵やまわ川柳

一没 句 供 養 句 会 一

日時

昭和五十一年十一月二日（一泊）

会場

三日月（文化の日）午前諸供養・正午より句会・出句・切一時半

柳話

高野山宿坊 大円院（南海高野線高野山駅よりバス小田原通り下車すぐ）

兼題と選者

川村 好郎氏

迷進

大矢 十郎氏

精進

垂井 千寿子氏

天國

若木 多久志氏

席題

一題（題は当日発表）

送会費

一泊三、五〇〇円（句会別）

投句日

句会一、五〇〇円（昼食共）

送り先

締切十月三十日必着（五〇円切手三枚同封）

〒640 和歌山市小松原通り六一

垂井 方 和歌山市小松原通り六一

〒640 和歌山市小松原通り六一

野村 茂津 和歌山市小松原通り六一



静かすぎる

51年度同人総会

(10月3日)

—文化会館別室—

まず会場正面には滋雀氏の麗筆で、

式次第

司会

西尾 榮

開会の辞

川村 好郎

挨拶と経過報告

中島 生々庵

会計報告と質疑応答

若本 多久志

閉会の辞

菊沢 小松園

これは毎年同じである。実に十一年間もつづいているのである。

名司会西尾榮氏のテキパキとした名調は今日の快晴そのまま、会場は明かるさがいっぱいだ。

開会の辞の川村好郎氏の温顔はさらに会場を和ませ、川柳塔がますます幹を太らせ大木になっていくよう、すっかり同人が手を握

り合っているこうと力強く開会を宣せられた。

挨拶と経過報告に中島生々庵主幹が演壇に起られた。主幹は黒メガネをかけておられ、いつもとはイメージが違ったが、少し目が疲

かれたご様子で、お元気さには変りはない。本年はハワイ吟行という画期的な日米交歓

川柳大会をはじめ、各地の川柳塔系の川柳大

会には各氏が万難を排してでも出席し、横のつながりにも全力をそそいだことをのべられ

た。ご自身も西日本川柳大会へ出席され、あの台風17号にさんざんいじめられたと、明らかに述べ懐かれたことである。

主幹ご自身のことなので割愛されたが「生々楽天」の刊行記念句会から、画展、パーティなども経過報告の中で的重要事項である。

(註・記者)

主幹は会場内を見まわされ、女流作家が一人も出席していないが、と記者にたずねられた。女性性は「総会」という固苦しいムードを逃避する習癖があるようである。このような和気あいあいの座談会まがいの同人総会なので来年はぜひ女流作家もご参加ねがい、女性側からのご意見なども発表していただきものである。

会計報告と質疑応答の若本多久志氏も元気に登壇され、さすがに社長業のベテランだけに、明快な会計報告をされる。

三年前に故福島鉄児氏から、川柳塔健在なりや、と危惧の念を持たれたことがあり、その時「大丈夫」とお答えしておいた。本年の

会計報告はそれを裏書きするように、漸次うわ向き一途をたどっていると、力強い会計報告に会場内はますますのんびりムードだ。

多久志氏は永年の経営哲学から耐える力を強調された。大相撲力士の魁傑が大関から平幕に落ちたが、少しも屈せず、明日を信じてコソツコソ努力した結果、秋場所は14勝一敗で優勝、来場所は関脇（予想）になり大関への足がかりをつかんだように、努力を惜しまねば川柳塔はますます強固になるだろうと結ばれた。

そして質疑応答の難関に入ったが、誰方からも発言がない。「万事任かせた」というのであろうか。だからこの総会に二時間とおいたのが一時間以上も早く済んでしまい、記者から「少しは多久志氏をいじめる発言をしてほしい、そうでないと総会記事の書くネタがない」とハッパをかけたが、明かるい笑い声が返ってくるだけだった。

懇親宴は四時から五時になっていて、まだ食堂の用意が出来ていない。そこで、時間つなぎといつてはへんだが、竹原の山内静水氏と、出雲の尼緑之助氏に登壇ねがって、それぞれの来年の抱負といつても、たけはらと、いづもの話だが（註・同人総会とは無関係）

（係）前者は52年度大会以後は「近県」というタイトルを外し、純々たけはらでいくこと。後者は52年10月22日に「いづも川柳会五十周年記念川柳大会」を開催することである。そのうちに地階の食堂から用意が出来たという知らせに、フアミリー川柳塔社同人は、閉会の辞の名物、菊沢小松園氏のザ・エンドのことばに、全員乾杯の場へ移動する。

この日、主幹から「川柳大阪」の児島与呂志氏と、「川柳東大阪」の竹中肖二氏が新常任理事として、お力添えいただくようになったことを報告された。

なお遠来の尼緑之助氏（出雲市）山内静水氏と三宅不朽氏（竹原市）横山一声氏（岡山県）が拍手を浴びて紹介された。

本年の同人総会の出席者がややさびしかったのは、各地の川柳大会へ本社同人が選者になっていたためである。これはやむをえないことである。

出席―西田柳宏子・児島与呂志・山内静水・三宅不朽・中川滋雀・榎谷漫柳・阿万万の・戸田古方・神谷凡九郎・横山一声・島居百酒・城一舟・傍島静馬・正本水客・若柳潮花・黒川紫香・中島生々庵・若本多久志・村田颯太・金井文秋・西尾栞・菊沢小松園・竹中肖

二・大坂形水・川村好郎・西いわを・尼緑之助・桑原喜風・岩本雀踊子・不二田一三夫・小谷葉子。



川柳塔社常任理事会（10月1日）

生々庵主幹は欠席されたが10月3日の同人総会と二賞発表句会には出席されることになっている。

51年度二賞選考の反省会ということで、いろいろ意見が出たが、結果は毎年同じような意見より出なかった。

同人総会も改選は来年なので、これという話題も出ずに進んでいった。

久しぶりに川村好郎氏が出席された。閉会の辞と自称される菊沢小松園氏が珍しくも欠席。

新常任理事の児島与呂志氏が出席。この人は体を使ってくれるので、今後の活躍が期待される。

出席―傍島静馬・野村茂津・本多柳志・若本多久志・島居百酒・金井文秋・西尾栞・橘高薫風・西いわを・児島与呂志・川村好郎・不二田一三夫（敬称略）

にぎやかな

51年度二賞発表句会

昭和51年10月3日
会場・文化会館

51年度同人総会―懇親宴―それから51年度の二賞発表句会と、会場を二カ所変え、終始

はがらかムードでスケジュールを追っていく生々庵主幹の柳話は二賞選考の苦心談からはじまる。路郎賞の場合、一三夫氏から無記

名の候補句が提出され、スタイルは毎年同じであるが、年々選考委員の発言が活発になり正に火花の散るようであると、9月3日の常

任理事会の夜を思い出すように述べられる。女流作家の路郎賞は昭和41年度第一回の内

藤さき子さん以来、昨年の林瑞枝さんと今年の十一人間に三人というこの栄光のかげには

美代さんのなみなみならぬ努力があつてのとて、ますます精進するよう祝福のことばで

柳話を結ばれた。主幹の手から路郎賞の岩田美代、準賞の三

宅不朽、谷垣史好三氏、川柳塔賞の安達潮音（代理・尼縁之助氏）準賞の山田スミ子（故

山田季實氏未亡人。代理・山内静水氏）同江口度諸氏に記念額と賞状、それに生々庵主幹

の色紙（副賞）がわたされと期せずして場内は拍手の渦である。（各受賞者の記念撮影

は岳人氏のお知り合いの前田氏をわずらわせ

た）司前川柳社はほか多数の祝電が披露され二賞発表句会にはクライマックスを迎える。

月間賞は「川柳のひき出し」といわれる正本水客氏が獲得された。―閉会8時

（進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊）出席―与呂志・喜風・水客・形水・柴香・

潮花・一声・文秋・肖二・不朽・静水・いわを・凡九郎・飄太・静馬・漫柳・緑之助・百

酒・多久志・生々庵・鬼遊・葉・誓二・蘭・万の・酔々・雀踊子・一舟・小松園・古方・

つき子・柳宏子・滋雀・雅風・夕花・柳志・とし子・度・花梢・美代・美幸・一念・天笑

・野生・吸江・千万里・維久子・綾女・好郎・一三夫・寿美子・恒明・敏・あいき・君子

・庸佑・右近・史好・古啓・喜美子・弘生・醉升・儀一・川狂子・弥生・牧人・薫風・岳

人・葉子。席題「カメラ」山内静水選

カメラなら岳人に任せとく吟行 一三夫

意志あればカメラは目をばつむりたい
フラッシュのまんまん中に居る疑獄
容赦なくひとのカメラで撮りまくる
横顔に自信カメラを意識する
アマチュアのカメラへモデルくたびれる
底辺の善意カメラに見落され
五つ子へ向けるカメラはあたたかい
争うに判定カメラがとらえて居
シャッターチャンス又榴弾が炸裂す
カメラ動いて男の顔が満ちてくる
子が走るほかはどうでもよいカメラ
テトラポッドをカメラが写している風
意地悪なカメラにあくび写される
UFO見事捕えていたカメラ
カメラマン山男ほど荷を背負い
家族ばかり写して飽きもせぬカメラ
逆光へ向けるカメラが冷えてくる
北方領土日本のカメラに写らない
パニックへ素人が取材したカメラ
胃カメラまで撮って真相明かさない
父の日の老父を囲んでいるカメラ
子が出来てそれからカメラマニアなり
附敵カメラで捉える地獄おもしろい
八合目大事なカメラ重くなる
瞬間を捕えてカメラ非情なり
カメラ向けると他人の顔になり
SLにひかれカメラにまた憑かれ
人情のかけらをうつしているカメラ
写されて写して上げて旅楽し
シャッターをたまれ見せつけられてい

凡九郎
天笑
儀一
不
潮花
静馬
夕花
一声
古方
維久子
好郎
水客
渡
庸佑
柳宏子
文秋
美幸
美幸
一三夫
静馬
滋雀
野生
醉々
敏
水客
あいき
滋雀
雀踊子
柳志
寿美子

天高く今日は喪服を撮るカメラ 君子
カメラから覗けば確に女の子 静水

席題「乾杯」

尼 緑之助選

おあずけの顔で乾杯待っている 文 秋



受賞者の記念撮影（前列左から谷垣史好・岩田美代・尼緑之助（安達潮音氏の代理）・三宅不朽、後列左から江口度・山内静水（山田スミ子氏の代理）諸氏。

乾杯に金婚の顔若返り
乾杯へ心ふれ合う初対面
和やかな湯のみ茶わんと言う乾杯
乾杯の盃記念にする米寿
乾杯へ手伝いさんも呼び寄せる
乾杯へ左遷忘れている決意
乾杯に幼馴染というとなり
敬老日実感に遠いグラス乾す
外は北風 乾杯 南 向く
乾杯はしたがしこりはまだ残り
乾杯の酒をこぼした借り衣装
乾杯の音頭で一部をしめくり
乾杯の音頭朗々まだ若い
乾杯へ下戸も同じポーズする
離伏十一年 乾杯の眼に涙
乾杯をしたらホステスもう居らず
乾杯へ男の泣ける場所である
乾杯をして泣いてる鬼刊事
乾杯の音頭をビールの泡が待つ
乾杯の妻のその手は濡れたまま
乾杯のいが私の負けでした
あり合わず湯吞で乾杯して涙
乾杯へ最年長を確認し
乾杯に男の野心ひそめてる
乾杯に世話役席へ駆けてくる
乾杯に映える佳き日のシャンデリア
乾杯にでかいダルマの眼も笑い
乾杯へしずかに闘志満ちてくる
乾杯へライバル闘志たぎらせる
乾杯のカップルもうハワイの空に居る

儀一 花梢 美代 綾女 紫香 好郎 雅園 醉風 庸佑 多志 敏二 恒明 多志 雀踊子 肖二 肖二 吸江 寿美子 弘生 君子 文秋 滋雀 紫香 綾女 夕花 維久子

幸な乾杯ふたりきりの膳 潮花
乾杯が左遷の人へ派手すぎる 柳志
乾杯の手附に女のつやがある 維久子
乾杯のあと敗北をかみしめる 千万子
缶ビールで乾杯登頂成功す 万的
末席は訳の判らぬまま乾杯 柳宏子
心から乾杯ライバルに負けた恋 誓二
乾杯に映る星なら飲み干そう 酔々
乾杯の母に片手を添えている 水客
乾杯がすむと主客はほつとかれ 度
頂上の乾杯こどもと二人だけ 漫柳
乾杯の母の猫背が美しい 維久子
乾杯へ日本大使背低し 栗江
さあ乾杯君の中には僕がいる 緑之助
乾杯の涙唱和の中で呑む

兼題「拍手」

菊沢小松園選

アンコール舞台の死人も起きて来る どんたく
形どおり拍手へ幕がまた上り 優
ワンマンシヨウ人がするから拍手 登美也
満場の拍手に彼の音がない 無聖
アンコールの拍手へポーズ耐えている 一榮
日の丸へ湧いた拍手に涙ぐみ 藤持
演出の拍手にズレた音がある 寿美子
拍手の渦の中で自分を見失う 君子

★同人の方は本社の同人バッジをつけるようにしましょう。

★女性用バッジもありますので同人総バッジで胸を張りましょう。

一個千五百円（送料共）

カムバック今日バラ色に鳴る拍手
ライバルに送る拍手も持っている
敗者の背へ送る拍手が温い
会者常離拍手で送ることにする
横むいて拍手をしているのも混り
鳴り止まぬ拍手の中に明日が無い
万雷の拍手止むのを待つゆとり
拍手せぬ一人へ光る社長の目
その時の拍手が欲しくて偽装する
なにもかも水に流してやる拍手
お情けの拍手は耳につきさきり
間をおいて悠々拍手待つ構え
勇退の拍手は背できいておく
耳をすませばほっくり寺から拍手
定退を送る拍手は揃わない
バラバラの拍手へマイクなどいら
皆が叩くからいっしょに拍手して
血の通う拍手となつて止らない
お隣りにつられて拍手してしま
勇退を送る拍手に嘘がない
済んだ済んだという拍手も混つ
いつまでも拍手が続いている不安
栄転へねたみも交っている拍手
バラバラの拍手に講演者拍手
定年の拍手は妻がしてくる
正面に拍手せぬのが一人居る
拍手せぬ母の涙を見てもう
差し障りのない人だけがする拍手

兼題「拔群」

川村好郎選

拔群の腕が自滅のつかい込み
拔群の管の我が子が手を上げず
拔群の出来とごますりだけが賞め
拔群の實力となる金を撒き
拔群に効いた薬の副作用
拔群は南の風に乗る自由
拔群の功老兵の語り草
拔群の才能隠す程目立ち
医者には惜しい拔群の撥さばき
拔群の読みの深さが神話めく
飲むことは拔群をこけ父に似る
拔群なアイデア持つて居るゆとり
拔群の裏に秘密の鍵がある
拔群の出世門閥などいわず
妻だけが夫抜群と思つてい
拔群の手腕自分を見失ない
拔群の味茶づけの旅がえり
拔群の先頭を歩く狐を見つめ
拔群と思う欲目の菊作り
拔群へ孤独の影がつきまとい
拔群の勲功わびし松葉杖
拔群の出来のその後を危ぶまれ
ずばぬけてからの仲間距離が出来
我ながら抜群と言う出来に酔い
拔群の家系おとこにある疲れ
拔群な計画水が漏れていた
拔群の伸びせールの涙です
拔群と自認した時下り坂

兼題「本社」

若本多久志選

無聖
どなた
文秋
牧人
古啓
弥生
醉升
儀一
水々
吸江
野生
いわ
多久
多志
不朽
柳宏
花梢
美代
維久
弘生
一三
弘生
潮花
水客
野生
滋雀
好郎

とき 十一月十四日(日)
ところ 堺筋地下鉄長堀橋南三〇〇米
福徳相互銀行本店八階ホール

第十回

奇術発表会

午後一時開演
入場無料

関西奇術教室

本社竣工ノルマが恐い営業課
本社詰め夢見てペン取る北の果
倒産の本社に残る庭の菊
山猿で結構本社に媚びてい
本社もうぐんぐん伸びる棒グラフ
不発弾抱いて本社を出る左遷
エリートへ本社に坐る椅子が待ち
本社しか知らぬ社長の廻り椅子
本社からの視察へ杓を正しとき
下請けの下請け本社をまだ知らず
まだ本社知らぬが一生勤める気
東京が本社社長の顔知らず
栄転の本社で詛り抜けきれず
返り咲く本社の席は生まぬるく
本社には不向反骨締めだされ
本社勤務という名でクビの座にすわる
その気骨本社をはじき出されたり
本社また吹き飛ばされた椅子があき

水客
野生
滋雀
紫香
風舟
一遊
鬼遊
栄一
優栄
無聖
祥月
女

本社から電話栄転はのめかし
 念願の昇格本社へ返り咲き
 アバートのワンルームです本社です
 難居ビル本社も隅に肩を張る
 六畳一間が東京本社になっている
 本社からすぐ腕はっぱ掛けに来る
 本社から来たバリバリがかきまわし
 本社から監査いきなりやつて来る
 アメリカに本社赤旗振れません
 日本を背負って本社飲んでる
 役員入替え本社は危機を乗切る気
 不況風本社のネオン消えている
 本社もう支社に抱かれてる赤字
 本社の眼支社のホープを見逃がさず
 正論へ冷たい本社の返事来る
 本社指令下ほど強く守られ
 住民パワー本社へも押しかけ
 チャーター機本社の上は低く飛び
 スエーデンに本社があつてボルノ
 本社から貰いがかる美人秘書
 報いるに本社の稲荷小さすぎ
 倒産のうわさ本社から洩れる
 本社まで叱られに行くひとり旅
 本社出張心に重い鍵をかけ
 灰色の社長を信じきる本社
 合併に本社が支社となる落目
 有為転変知って本社古機
 工場はのどか本社を羨ま
 先代の遺影が飾ってある本社
 本社は船場腰の低くさも社風です

醉升 醉生 喜風 天笑 恒明 肖二 史好 弘生 万的 醉々 花梢 一三夫 美幸 綾女 恒明 小松園 潮花 一三夫 美代 吸江 度々 醉馬 静久子 維好 史好 弘生 生々庵

一生を本社に埋めた父の自負
 いつの日か本社復帰の日に耐える
 本社風吹かせて課長そり返り
 多久志

兼題「祝電」

西尾

葉選

竣工の祝電金繰りの苦を知らず
 祝電を打って迷いの義理が晴れ
 祝電の数にこの家の間口見る
 大臣になって祝電打ちたがり
 祝電で名士ずらりと欠席し
 祝電を打って女は旅に出る
 脅迫に似た祝電も混ってた
 祝電の一字一字がバラ色だ
 祝電に傾く老父の背は確か
 旧姓のままで祝電くれた女
 祝電の灰色の名は小さく読み
 祝電のきまり文句でない温み
 祝電をよそに達者を祈る母
 祝電を打ち寝返りの肚決める
 祝電披露される頃羽田発ち
 祝電を打つとけばよいそうしよう
 借りのあるヤツからも来た祝電
 懸崖の菊祝電に揺れている
 あとあとのことあり祝電いち早し
 祝電へ妻も伏目のままならび
 祝電と弔電同じ靴で運ばれる
 来るべき人の祝電が来て居らず
 一票が欲しい祝電白々し
 悪友の祝電リラックスしてくれる

君子 蘭 多久志 一栄 一舟 古啓 古啓 史好 夕花 鬼遊 弘生 天笑 漫柳 恒明 誓二 鬼遊 一三夫 醉々 恒明 庸佑 美代

嫁ぐ日の祝電父は聴いていず
 祝電を打ってこの恋あきらめる
 七人の敵から祝電来た鼓動
 祝電へ花嫁かえる橋がない
 祝電をうって過去の人に
 祝電はネームバリユの順に読む
 八百長みたい祝電打ってくる
 祝電のない人生で満ち足りる
 祝電に女のうらみは書いてない
 ライバルの祝電たたい終つて
 祝電の中の一枚別に
 祝電のくる日金木犀匂う
 祝電のおとこは負けを意識する
 祝電を上のできく二人

不朽 静馬 弥生 弥生 肖二 肖二 古方 美幸 雀踊子 弘生 維好 史好 水客

▼十一月八日句会からまた金属会館へ
 ▼十二月句会は七日(火)です。

華道関西末生流家元

籠島 総甫

教室 西宮市北口町七ノ九

電話 六七六三六

教室 尼崎市武庫庄浅堀

電話 一五七一八

教室 尼崎市武庫之莊三丁目

電話 一五一三

教室 武庫之莊文化会

電話 (06) 四三二一〇七三



高橋操子句碑建立

—ちっほけな善意でもよし心満つ—

川柳塔社参事、高橋操子氏は麻生路郎門下で路郎先生ご在世中は川柳塔の前身「川柳雑誌」社の不朽洞会員として活躍、昭和二十四年四月に岸和田川柳会を創立、現在川柳塔社参事として活躍されている事は周知の通りであります。

また現在岸和田市文化協会副会長として協会創立以来当市の文化向上に寄与せられ特に昭和四十一年社会教育功労表彰をうけられるなど、あわせ句作の精進に励んで居られます事は、私のものとも飲びとすることであります。(後略)

高橋操子句碑建立委員会

委員長 西出仁三郎

建立地 岸和田市 久米田寺境内

建立時期 昭和五十一年十一月二十三日

協賛金 金壹千円(句主の御意志により
お一人壹千円に限らせて頂きます)

送金先 〒596 岸和田市上町七の三六
植山武助

(振替口座・大坂一九六七)

申込期日 昭和五十一年九月十日

(前略) 作家高橋操子氏は四十有余年の句作歴史を飾るにふさわしい句碑の建立に賛意を表し、発起人を設立し協賛するものであります。

発起人

麻生路郎夫人

岸和田市長

岸和田市教育長

岸和田市文化協会会長

川柳塔社主幹

作 家

友人代表

麻生 霞乃

原 昇

荒木 和雄

西出 仁三郎

中島 生々庵

不二田 一三夫

玉井 恒清

小倉株式会社社長 小倉 十 吾
実行委員

青木三碧・安宅川豊・板尾岳人・榎本聡夢
大矢十郎・太田小栄・岡橋寛介・梶川雄次
郎・葛城伊三郎・河内天笑・川村好郎・角
谷浩青・上林加仙・菊沢小松園・佐々木莫
平・庄司佳生・神藤敬子・新家有雅・須田
宏治・杉原芳子・高木武治・垂井千寿子・
外山飄人・富木静芳・内藤きさ子・中田た
つを・中村民治郎・中野三四郎・西尾榮・
西田柳宏子・野村太茂津・林春榮・林裕子
深日白光子・福浦勝晴・満田雪峰・八木摩
太郎・数年甫・雪本珠子・吉村静一郎・吉
村南風郎・吉村たけし・若本多久志・渡辺
千恵子・高橋幸代
句碑建立実行委員代表

植山 武助

(高橋操子句碑建立記念句会は別項参照)

老地柳壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

どんぐり川柳会

谷垣史好報

本物の親身は温もりだけ残す
妻だけにどんな謎でも解けてくる
哀しきは迷うたままの姫だるま
謎解けて少年哀しい顔をする
毎日の迷いは同じ市場かご
女として決意母として迷い
四十で不惑どころか日々迷い
泥つきの大根くれるのも親身
コーヒを飲んでそれから遺書をかく
迷ってる犬が信号見て渡り
廻り木馬乗る王様は迷うてる
飽き性へ親身の世話も水の泡
鬼の師匠の親身になった目に出会う
銅鐸の謎解けぬのに夢があり
どの蕾残すか迷う菊作り
迷ってる証拠みぞ板踏みはずし
鳥だけが親身に泣いてくれている

川柳高知

川竹松風報

鎮彦 弥生 千歩 美幸 好太郎 瓢太 鬼遊 岳人 万里 儀一 蕉風 幽玄 いわを 喜風 史好 十面子 あつ子

奥さんを変な気分にするテレビ
理解ある奥さんの目がごまかせず
奥さんの苦勞も秘めて家が建ち
お隣り奥さんいらぬ知恵をつけ
奥さんにボスありPTAの会
奥さんの酔いへ手を貸す下ごころ

雨雲にせきたてられて立ち話
雨だれのリズムを床の中で聞き
また雨か今日も飯場の花がらた
雨足が岬かくしてやって来る
苦い顔して嬉しさがみしめる
この曲も思い出がありほろ苦い
明日終る旅へ夜中の湯にひたり
化石へ向う鯨もあろう埋立地
生活のためのピエロと諦める
横座りそれも魅力のお年頃
仲裁もここまてという痴話げんか

川柳後楽(岡山市)

井上柳五郎報

御先祖を大事にせよと遠回し
念仏を唱え先祖に愚痴を言い
先祖供養かかさぬ嫁で気に入られ
飲みつぶり祖父の血筋とすめられ
迎え火を焚いて先祖を孫と待ち
捨石となった裏にもある打算
捨石がもがけばもがく程埋まり
捨石となつて姉さん嫁き遅れ
川底の捨石おぼれる子を助け
捨石のあせり急流に流される
駅前のシンボル今日も人が待ち
シンボルとなり天皇は雲を降り
男性のシンボル産婆は軽く笑み

恭一 芽十 寛鳥 桂緑 嵐舟 亀野 佐恵 紀人 一二三 マコ 紅笑 窓花 海州 勝子 松風 たけ志 昌吾 めぐみ 廉元 柳一郎 哲郎 ひろし 千草 文平 照路 胡風 佐加恵

シンボルの鉄道旗赤字に欠伸す
貢がせて貰いで高官登りつめ
高官のこれが汚職の見本です
高官のまだ潔白を説いており
老人会手摺を撫でて順に降り

川柳大阪

児島与呂志報

アスファルト秘境を只の村にする
花散ればもう人影も無い小径
歩行者の天国今日のアスファルト
木蓮の花の白さに尼僧の手
虎杖がゆっくり伸びる谷間
花の里へ遠回りさす通り抜け
花名刺悲しい嘘も刷ってある
同じ腹やのに父似と母似の子
想い出はそとつとつんで角かくし
床の間の花も嬉しい客を待ち
想い出はきれいにしとくことに決め
黒幕が居った一人でない芝居
花もあり実もある話嫁き遅れ
アスファルトこんな露地へも市政生き
崩れゆく女の線が気にかかり
票になる道なら先生アスファルト
アスファルト四季の風情を遠ざける
雨降りの駅の階段すべそう
想い出を妻に残して掘り出す

川柳東大阪

竹中肖二報

卓上を叩き大分焦れている
叩いたら動く時計をまだ飾り
おでこを叩くと失敗の音がする
喉ぼとけあたりで止めておく噂
花園で蝶は嬉しい噂する

恒洋 戡嘉 秋月 久米 定平 敏 本蔭 六竜 甫久 弘生 重人 誓二 道子 双虎 三十四 胡蝶 雅果 微笑 徹舟 秀峰 一秀 与呂志 文秋 好郎 智彦 鎮彦

京都塔の会

松川杜の報

血縁を説いて聞かされ胸打たれ
父逝きて大ききを知る世のならい
寝不足がたつて故郷の夢を消し
なで肩の男意外な度胸見せ

肩の線男を知っているしぐさ
やと手にすれば大きい優勝旗

血のにじむ爪で西陣護られる
夢大ききで汚職に手をのびし

顔色も変えず大きな嘘をいい
朽ちた樹の匂い祠の雨上り

無難作なコテ跡壁が生きている
吊り橋を犬もさつさと振りむかず

原爆の悲劇をかくすサン格拉斯
こんな時血を引いているなとも思い

肩叩かれた車から汚職までつづき
親の血がただの夫婦にして置かず

城北川柳会

川口弘生報

白米に闇と言う名も付いた過去
米どころでも朝食はパンと言う

銀しやりをあてがれ抜いた戦中派
米もよし米の水より左利き

学者の古土器の粗跡見逃さず
新米も古古米もい食い盛り

米の値に直して回りにくい物価
米の味見直してからの胃の弱り

米飯を減して中年女やせたがり
パンはいや升で計って米を炊く

日本人パン食よりもやはり飯
米の中仏おわすり母教え

宿題の稲穂に今朝は花が咲き

永楽 比呂志 笛珠 耕三 客遊子 飛鳥 蘇堂 白漢子 拓美 潮花 杜的 紫香 誠史 求芽 王石 水客 右近 近 喜代子 玉生 弘生 恒治 ますえ 百酒 比呂志 星斗 千ね 一つ休

一人居の米櫃虫のつづりたる
米寿なお自分の歯でうまい飯
冷害で餌と呼ばれる米哀し
新米の味は雀が試食する
ハワイ川柳ウイロー社 林蒼蛇樓報

敗まして母は笑顔でできいくれ
敗まされた妻へそくりでかたきうち

敗まされたふりして食わず背負い投げ
敗まされた祖父ちゃんから笑つて

敗まされた殺し文句が悩やませる
敗まされたまだ信じてるお人好し

敗まされてやめたベテンにしてやられ
敗まされる方が間抜けと言う世相

敗まされたふりして相手の腹を読み
おえら方狐と狸のだまし合い

敗すとは知らずにのった口車
敗すなど知らず浮世を丸く生き

敗まされて飲んだ苦汁が今の幸
敗ます気の今日は黒子を右につけ

敗ましたと知らず妻は酒支度
手のこんだ詐欺とは知らず引かかり

敗まされて居るとは知らず皆シャベリ
にじみ出る人柄はでは敗まされず

三井が丘川柳会 高田博泉報

幅広く女が使うバスタオル
昼休みひと汗かいてきた広場

号令をかける広場にしてはならぬ
回想の広場の鳩はあつち向き

ランチタイムの広場に開放感がある
パンクした自転車押して家遠し

晴子 秀村 満津子 道子 拜山 彩瑛 快夢起 峯円 公女 万里歩 草海 蒼蛇樓 柳子郎 小雪 紅溪 蒼生 一つ葉 カロ 風影 北舟 北海 雪女 三石 鬼遊 亜成 形水 惠美子 牧人 一菁

遊び場所いつのまにやらヤグラたち
立退きで出来た広場へ種を蒔き
ポケットの小銭鳴らしてペタルふむ
子供等の広場を守る朝を掃く
盆踊り広場に合うた輪を作り
赤トンボサイクリングについていく
広場から聞こえる声は日曜日
せせこましき管理下にある広場
夕涼み駅前広場コンサート
自転車旅青春は草に寝る
バスタオル巻いて女が爪を切る
サイクリング風は緑という匂い
平和万歳太陽万歳バスタオル
自転車降りねばならぬ人が来る
和歌山七面句会 中筋三幸報

亜句堂 一音 琴路 小路 野生 博泉 度鈍 亜三子 三千子 亜也子 美幸 風 太茂津

佳句地10選 (前月号から)

中川 滋 雀 選

積る話の袋を提げて母がくる
つますいた大人は過去にとじこめる
騙した方をおとなと思うことがある
信じられるものあり螢の光追う
溜息の重さを父の背にみる
砂に書く祈りを風が消してゆく
心地よい目覚め生きている意義を知る
受け皿となって妻たり母であり
嫁ぐ朝父の散歩に添うて出る
精霊舟流れるまでの罪の音 雀踊子

牧人 度子 智子 寛子 截喜 幸 漁人 文子 薫風 雀踊子

ちよつと差のありそうな人越して来る

義理を知る男旗色など云わぬ
マンションから転宅いえぬ訳があり

三度目の転宅となり海が見え
祝日の旗へ明治が住んで居る
盗ませたあの日の心若かりし

転宅の最後に運ぶ植木鉢
左遷の転宅祝い云いぞめられ

自治会長だけが国旗を出している
南海電鉄川柳会(大阪市)辻

目じるしの犬は秋田の産の由
目じるしを品定めする女の眼

目じるしと別に來賓通る道
目じるしがちよくちよく変わる繁華街

目じるしした手帳忘れたはしご酒
胸ボタン泣きそう母の原爆忌

目じるしの無い凡人の道を行く
タクシーのハンドル目じるし取り違え

目じるしが欲しい双生児の姉妹
西宮北口川柳会

影踏みの幼い記憶海の町
月の窓虫が詩心をかき立てる

夜行車へ温かそうな灯が並ぶ
遠去かる尾灯眺めてあきらめる

寝ていても胸に燦ぶる火は消えず
燃えたぎる炎女の業に似る

三角の愛はよんだ濁となり
陽溜りに老女倅せ置いてくる

墨染めに女盛りが朽ちてゆく
女ひとり錆びた鎖が断ち切れず

幸子

富子

光治

知也

隆恵

清二

宏幸

三水報

摩太郎

柳信

千万里

つき子

宏子

圭水

雅風

影一つ女の横に欲しいもの

追いかけてこない別れが物足らず

猛烈に生きる時計の捻子を捲く

薬玉が割れて未来が開かれる

薄化粧でよし夕顔と対話する

影踏みばどこかが痛む傷をもつ

大田川柳会(鳥根県) 藤田軒太様報

秋晴れて一家総出のコンパイン

米となる日までカンテラ猪の番

農政の盲点ついで米はでき

米どころ出来秋待つて嫁話

秋空へ追慕の夢を雲に乗せ

人間の醜さ秋の空に恥ず

忙わしさが受話機に流れ孫誕生

忙わしさに馴れて灯とぼす子沢山

喜世

紅扇

伊人

牧人

泉女

春昭

義昭

三三男

孝太郎

軒太様

ゆう子

雷音坊

水煙

虎秋

独仙

オンザロック氷のできる間が待てず

雷を落して父の座守りぬく

雷が縁をとりもつ雨やどり

乗客の一人の勇気が輪になつて

登秀彦

川彦

高橋操子句碑建立記念句会

日時 昭和51年11月23日(祝日)

午前10時

会場 久米田寺境内(国鉄阪和線久米田駅下車・東へ徒歩10分)

司会 西田柳宏子

兼題 柳話

「池」 榎本聡夢 選

「竹」 梶川雄二郎 選

「幕」 川村好郎 選

— 64 —

蜜勇をふるう若きがなつかしい
人前で恥をかいてみる勇氣
小さな勇氣年寄りに席譲る
酔い覚めの氷は妻の思いやり
氷上の競技に光る汗を見た
反対を唱える勇氣きえていた
本当のことを言うのに勇氣
クーラーをつけるに親子もめている
くそつたれ氷の様に無愛想
流行を着るにちよびり勇氣要る
雷をひとり聞いてる長さ
神の名を借りて四人目直む勇氣
ストロークで氷をつつく生返事
おみこしの渡御待ち遠しき氷
紅川柳倶楽部(唐津市)新岡回天子報

田舎者集めはき出す八重洲口
萩活けてまだ焼酎の匂う瓶
祝祭日あつて小使足らずいる
稲の出来上々天下の秋晴れる
絶景の裏で民宿米をとき
住宅が米のなる木を削り取り
網干して漁夫秋晴れに昼寝する
パチンコの隣の台が気にかかり
じゃがいもが嫌い米飯たべ残し
米国の小麦を買って古米溜め
青空を灰色に塗る都会の子
大都市に住んで故郷の良さを知り
この米でアル中起こす酒も出来
肉眼で読めぬ文字を書いた米
秋晴れて朝顔小さく咲きそろう
ゆうもあ川柳会

聖地 有地 垂成 野生 ひとり 一扇 木石 常夢 千夢 形水 弥生 寛子 入仙 好郎 五木 照沖 広坊 岩光 桑原 烟中 勇 三日造 金隆郎 久隆 勝一 紫浪 虹汀 回天子

二代目の墮落をしかる鬼かわら
お説教ぬるいビールで締め括り
金賞の菊に集まる目とうわさ
菊花見る兵器の紋章思いつつ
菊の花秋が来たようれしそう
産み分ける葉どこかに無いものか
炎天下女の武装日焼け止め
南大阪川柳会
中川滋雀報

里心都の鬼になりきれず
里心女は深いここへ秘め
無一文夕陽が責める里心
うっふんを抑えてサラリーマンの日々
うっふんを納める指輪買わされる
うっふんを明日に延ばす日記帳
肉体が資本赤銅の肌光る
肉屋の前で女そろばん弾いている
コマシヤル部厚い肉が焼けている
商人は頭の低いのが儲ける
底辺の職で定年満ち足りる
借金が出来た頃から低姿勢
昂ぶりを静める帯を低くして
チンピラのグループに居る女王蜂
グループの名で外泊を父母に説く
前向きな姿勢グループから消える
知らないこと云わさぬテーパー出し
出張の記録に書きぬ夜がある
先輩の記録まだ健在な棒グラフ
青春の記録の中に母がいる
美幸

52年の新春広告を個人・グループを問わず
ご協力のほど、よろしくお願ひ申します。

昭和51年度大阪文化祭

第28回川柳大会

日時 11月7日(日) 10時開場1時締切

会場 中央公会堂(3階小集會室) 地下鉄「淀屋橋」中之島公園内

講演 「大阪の史蹟」 大阪市立博物館長

兼題 「シンボル」 平山敏治郎氏

「妻」 磯野いさむ選

「芝」 井上淳一郎選

「近頃のニュースから」 三輪 喜正選

「幻(まぼろし)」 池内 雅已選

「泡」 西尾 梨選

「当り4題・各題2句・締切1時」 永田 帆船選

出句は出席者に限ります。(兼・席題共、当日会場で受付)

賞 兼・席題の秀句に、府知事・大阪市長、府市教委長から「川柳賞」選者から「選者賞」を贈呈

入選句集代三百円・当日申込受付

主催 大阪府・大阪市・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会

川柳塔社同人総参加ノ（一人二句以内）

新年号を飾る「ユーモア特集」

（締切厳守・十一月二十五日着便まで）

川柳に忘れられているものはユーモアである。そのユーモア味のある川柳で新年号を飾っていただきたいのです。

年賀広告受付！

本誌五分の一段二千円です。

グループをおもちの方もご利用ください。

★原稿締切・十一月末日

あなたもぜひ一口

この寸法が400円です

川柳塔社

振替口座大阪
三三五六九番

一月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）

「初」宮西弥生選
「祝」辻圭水選
「旗」浜畑胡蝶選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）

「消防車」河井庸佑選
「花嫁」原田一風選
「豆まき」遠山可住選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りま。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

一人の遅稿 大ぜい困る

定価 三百五十円（送料29円）

半年分 二千二百五十円（送料共）
一年分 四千二百円（送料共）

昭和五十一年十月二十五日印刷
昭和五十一年十一月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地

編集兼 発行人 中島蓬太郎

印刷所 藤原童心社

郵便番号 542

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一一三九八番
振替口座

本社十一月句会

日時 十一月八日（月）午後六時
会場 金属会館
電話 271・3935番
南区鰻谷東之町10番地
柳話
兼題 「市民」「高台」「はかどる」「縞」
席題 二題 当日発表
会費 三百円
★投句だけの方は切手百円封入

（今月の出題・谷屋史好）
本多柳志選
傍島静馬選
黒川紫香選
正本水客選
各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

12月の兼題

「古臨」「木時」「占応」「い援」

・ペンペン草・

はたらけど

★啄木のうたではないが、はたらけど、はたらけどである。しかし、暮らしたが楽にならない、はたらくが経営していた場末の映画館の売店が全焼した当時、道を歩いていても映画館のポスターばかりが目についたものである。小屋は三流だったから売れ行きは一流館に負けなかった。そのころ久米奈良子さん（川柳啓社同人）が遊びに来てはよく

アリナミンA

お役だていただくために タケダ

肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB₁補給、神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。

☆1日、1〜4錠を、1〜3回に分けて服用してください。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆25ミリ錠のほかに5ミリ錠。

武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27

手伝ってくださった。あれほどよく売れたのに一ヵ月遊んだら食うに困ってしまつたのは、日頃の心がけが悪かったのであろう。まだ「川柳雑誌」に籍を置いていたので勝手なことでも出来なかつたが、辞めてからモノを書き出し、どうなりかうなりうどんの一杯ぐらいは外で食えるようになった時、はたらくこととはいふことだとつくづく思った。

★本誌の「はたらくうた」も昭和41年11月号から始まつて、今年で12回目を迎えている。まだあんなことをやっていたこともあつたが、タイト

▼葉子コーナー

▼片すみに小さくなつていた鉢植の紅葉もこの頃色づいてきて、ペランダの引立役となりました。▼八年程前に、不二田さんに連れられ、美田さんと三人で箕面へ紅葉狩に行きました。家の紅葉を見るたびに、その時のことが懐しくなります。▼今年も高尾や箕面で思ひ出をつくられる方が多いことでしょう。

ルは同じでも執筆者が毎年代わるので内容はいつも新鮮である。

★はたらかずに川柳する人はまずあるまい。大半はアマなのだから、川柳はメシより好きだ。なんていうのはウツである。腹がへつては川柳は出来ない。まず第一に仕事は上げみ、第何番目に川柳であらう。

★と▼

★「川柳雑誌」時代、★印は路郎先生の専用だった。はくらの原稿は▼だった。今は、このページの大将に出世したので★を使い、小谷葉子さんには▼を使つてもらつてゐる。

不の字

★この「不」という字を使つて穴埋めを書いたら、路郎先生から「不死鳥というペンネームを持つてゐるの、時には「不」で書くことがあるから、キミは遠慮してほしい」とのことだった。筆名侵略ということである。だから当時は「F」を使つたものである。今は「不」と「F」を使つてゐる。筆名といへば、今こそ二つか三つよりないが、火災以後大阪の夕刊紙に片っ

不二田一三夫著「川柳」

おかげ様で残部僅少になりました。ご支援のほど厚く御礼申し上げます。そこでお手許の拙著でもし表紙などが破損してしまつたらご返送くださればお取替えいたします。送料は当方で負担いたします。

（著者）

ばしからコントを投書してゼニ儲けに走つた時代があつた。当時は七、八つぐらい筆名を持っていたので、投書先の新聞社専門の筆名をこしらえていたものである。

★林不忘で「大岡政談」を牧逸馬で「この太陽」を書き、谷譲二で探偵ものを書いた作家があつた。この人は机の前に三つの筆名を書き、その下へ原稿の題名を書いて、三者の稼ぎ高の競争をさせていたということだった。ばくもそれを見まねて少しの間、やつてみたがどうしろんでも読者の投書だから一ヵ月20篇ほどより使つてもえなかつた。それでも二万円にはなるので10日間ほど仕事をしては20日間がブラブラ。このブラブラ20日間を有効に使えば生活が楽になるのに、生まれつきのノラだから、小遣

前号二賞きまる追捕

★二賞に島根強しを書いたが、大物を書き忘れた。夫君が路郎賞、奥さんが川柳塔賞のグラン・プリ夫妻、堀江正朗氏と堀江芳子さんのことだ。ご夫婦で二賞を獲得するなど空前絶後、谷岡芳枝さんも入賞の一人。

秋

★本号に吉田水車氏と小川静観堂氏の追悼文を出したが、次号では岸和田の葛城伊三郎氏が待つてゐる。イヤだなあ、こんなページを毎号組むのは。

（不二田一三夫）

定価 三百五十円 (送料二十九円)